雲雨荘雑記

特231

575

始

特231
575

東西莊雜記

昭和七年
帝國圖書館

序

今の世にもてはやさるゝ野球、誤流布、映畫の類ひ皆われ之れを好まず。わが嗜む所にしたがひ、閑ある毎に都門を去つて夜雨莊にあけくれの樂は、隣居鈍翁大人の幽棲を驚かし、芳茗を喫し、雅什を品し、あるは歌を詠み、あるは文を草して悶を遣るの間に在り。されば今年の正月よりこの方積りて此一卷となりぬ。もとより大方に示さんとにはあらず、さすがに捨て難くて後のおもひ出にもとなり。

昭和七年秋十月

夜雨莊主人誌

夜雨莊雜記　目次

歌日記……一
强羅行……三
歌日記……二八
滿洲行……三二
安奉線の旅……四一
朝鮮一過……四四
山陰の旅……四七
寒拾……五〇
濱木棉……五〇
駒井德三君を迎ふるの詞……五一
送駒井長官歸新京詞……五四
滿洲却略……五五
月下の宴……五六
鶴見丘……五七
旅愁……五七
馬占山將軍を憶ふ……五八
鈍翁遺言狀之事……五九
三溪先生の畵を求むる文……六一
銘雲隱れ茶碗之記……六三
茶きよう……六三
虫よけ……六三
飯後庵……六四
鈍太郎寫茶碗……六五
手造ね……六六

鈍翁と石垣山にのぼるの記……六七
釣　雨……七二
猿若之茶……七三
灌佛會……七四
不問庵御茶事……七六
梨惠治の茶……七七
御神水器……八〇
掃雲臺朝茶……八二
品川の御茶事……八三
光悦茶會之記……八五
中興名物の茶……九〇
唐櫃山莊……九四
一笑庵の茶事……九六
光悦の茶……九八
伊藤氏の御茶……一〇二
關戸家を訪ひて……一〇五
釣雨と地獄……一〇六
三溪先生の詩書……一〇八

夜雨莊雜記

夜雨莊主人稿

正月三十日、朝夜雨莊に目覺めて

おりたちてあかとき庭を眺むればゆきかも降れる白梅の花

曉天掃雲臺の松が岡にのぼり、明治大帝の御靈を拜す

谷をうめて梅の林のさきみちぬおり居る雲とおもひ見るまで

白梅は神のめづ花ちり置かぬあした早くも見るべかりけり

相模なだよりくる波の影見えてあさ風さむし松が岡山

觀濤莊を過りて鈍翁大人に示し奉る

のぼり來る山の高井にわく水の心すみてぞすむ翁かも

立ちむかふひじりが岳に居る雲の西になびきて朝日さしそふ

きみがすむやどあたゝけみ冬にして次郎太郎草のはやもさきたる

二月二十五日、夜東都雪ふる、遙かに板橋の
鈍翁大人に寄す

あしびきの山の庵やいかならむみやこもけふはゆきにくれつゝ
きみがすむやどこそ冬の外なれどなほおもはるゝ雪の寒けさ
都ぢはゆきに埋みぬ板橋の山のいをりも夜寒なるらむ
板橋の山のみゆきやふかゝらむわがおもひしもやゝにつもれば
白雪の二子の山を板橋の端山の庵にたれか見るらん
はこね山二子をかけて見わたしの小田原までもましろなるらん
よめなつむころともなりてふるゆきは誰が戀よりのねたみなるらむ
ゆきを煮て夜寒語りもおもしろやうぢの木の芽の春となけれと
春となきみゆきもよしやたなつものことしもゆたにみのるとおもへば

二月二十八日、朝より忙用、午後小田原に赴
く途中

藪蔭のさかみちばかり消え殘る雪を染めてもちる椿かな

夜雨莊に投じて

庵のうちにひとりすわりて爐にむかふ心許りは靜かなりけり
まれに來ており立つ庭は笹の葉のちりしくまゝにあれまさりけり
呉竹のそよともいはで音もなし小笹がくれの庭のやり水
やれ垣の外を浮世としらずして庭の清水の流れ出づらん
あるじのみ出で入る門をさしこめてけふの一日はさはらざりけり
なにごともわすれおもはず小田原に來てすむ日のみ我世なりけり
冬ごもる程はさすがにせましともおもはぬまでになれし伏庵

掃雲臺にのぼりて

のどかなる春の日かげのさしそひてむろの苺の色まさりゆく
春の日のぬくみにふとる苺の實ふくろかむりてあからみにつゝ

二十九日、曉起東京に歸る

あかときの太鼓かしましいざ目覺め早く浮世へ出々とうつらむ
床のうちにきくもうげなる朝汽車のとゞろと橋を今渡る音
晴れわたる空の二子の二つみねまどにせまりて立つ朝かな

沿道徴集せらるゝ兵の見送り盛んなり、
送るもの送らるゝもの一聲に萬歳と呼ぶ

日の本の民はみながら軍人常につるぎはとりはかねども

三月五日、團男爵戯るとの號外を手にして

おどろきていふべきしらず世の人のなげきもさこそいまのたよりに

空蟬の常なき世とはしりつゝもこの人にしてかくあらんとは

六日、鈍翁大人に謁す、翁は團氏を惜しみて
吳〻の物語あり

昨日見てけふはあひえぬおもかげのなほたちさらでいたむ我むね

大人は年頃の盟友を失ひ孤身春寒のせまるも
のあらんを思ひ奉りて

うらぶれて物なゝげきそすてし世の月の光りのくもりもぞする

七日、再び鈍翁大人に謁す、昨日につぎて談
は團男の事のみ

世の中は斯くともいさや明日はまた野邊の送りに送らるゝ人

寶ともあるべき人のかさね〳〵なき數にいるあはれうれたさ

八日、團氏の柩前に立ち

なきたまよいふべきしらに我涙咽びてこゑをのむばかりなり

うちしめりぬれぬ袖こそなかりけれ遂ひの旅路のきみの門出に

今次マツコイ將軍を說破せしもの實に金子子爵と團男爵なりしと聞けば、惜しまるゝはもとより、男爵の如きは天成に出で求めて獲らるべきにあらず。況んや余が知れる範圍は大小男爵の指導にまつものなれば人々茫然たり。われ男爵に知己の關係なしと雖も難獲人才を愛惜して描かず

ひとつ星流れて悲し皆人の空しきそらをなほあふぎつゝ

きも向ふ心をよせて大船のおもひたのみしきみなりしかな

今はたゞきみなきあとのしのばれて心くだくるけふにもあるかな

ともし火の光りとたのむきみゆゑに消えてぞまどふやみのうつゝに

三月十二日、夕方夜雨莊に入りて

伏庵にすみやわぶるとゝふ人にきかせてしかな夜半の春雨

ひとりきていぬる伏屋の雨の夜は軒の玉水いねがてにきく
深き夜の軒の玉水音すなり今や寢ざめに君もきくらん
夜もすがらをやむ間もなき春雨を寢ざめにきゝていねがてぬかも
庵のうちにこもりてきけば春雨のふるびし家もうれしなか〳〵
ゆめさめてひとりきく夜の春雨は心にしめど寒くしもあらず

十三日、快晴

春霞いまだもうすしふたなみの二子の山やはだへひゆらん
朝がすみわけつゝのぼる朝日子の光さしそふ海のあけぼの

掃雲臺なる双松庵にて

二本の松の下庵一夜寢て見まくほりすも春のあけぼの
姿さへ枝さへ葉さへ二本の松のすぐれて見ゆる庵かな
世の外の蔭とたのめる二本の松ものこさぬ春風の音

觀濤莊に憩ひて

ふきあぐる井戸のま清水すむ人の心とや見ん松の下庵
にごりなき心とすめる山の井は宇治の木の芽にふさはしき友

すがしさは岩井の清水むすびあげて心を洗ふ松の下庵

鈍翁大人と語るに園氏を惜しむ話絶えず在すれば

老人の身をよそにしてなほ人の上におもひのたえぬ世の中
ながらへばまたしのばるゝ世の中をうしとのみこそおもはざらなん
春雨のふりぬる人をしのびつゝなげく許りは愚かなりけり

三月十九日、觀濤莊にて鈍翁大人に謁す。坐に長井實氏あり。今日も園氏追悼談頻りなれば

花またで散りにし人よりつせみのその世悲しき春風ぞふく
私のおもひさらなり國のため世のため惜しき君なりしかな

三月二十日、鈍翁大人に謁し、紙片に書いつけて翁に請ふ

木の芽煮るみやびに花を咲かせばやその花入のほしきけふ哉

翁は即刻霰と銘せる竹筒をたまはるに

うれしさはえがたき筒をたま霰そでにも身にもつゝみかねつる

家にかへりて

おきて見つかけても見つゝたまはりし君が心の花を見るべく
塵つみて拂はぬ家も來てすめば一日すがしき心地こそすれ

二十一日、早朝鈍翁大人に謁して

きぬ一重たがふといひし言の葉のうらがへりても寒き今朝哉

藤原一瞳庵主のために鈍の一字の揮毫を翁に乞ひ奉りしとき

運は天に根は地にまかせこの一字人の笑ふに任かせたらなん

翁は自動車にて海に沿へる岨道傳ひに伊豆の宇佐美へものせらるゝに別れまをしてわれは東京へ歸る汽車中にて

春の旅相模の海に沿ひて行けばいつか宇佐美にいづの海原

青山なる皇太后大宮の御茶を好ませ給ひ、さりぬる頃營ませ給へる御數寄屋拜見を鈍翁に許させ給ふ由を傳承して

いにしへはありけんことの雲居まで宇治の木の芽の匂ふ御代哉

三月二十三日、井澤老人の葬に

いまはとてつひの門出の君なればふたゝびとだにあふよしもなし

古寺に木魚の音のさびしらにとぶらひまをす讀經の聲

吹き通す風春寒の寺の庭花咲くまたでいにし人はも

藤瀬六郎君若くして逝かるゝを弔ひまをして母なる人へよすとて

咲きて散らば香しも殘らむ香もなくて消えしぞ惜しき花の蕾は

春寒のひと日かなしきおもひ出のなみだにそでをしぼるけふかな

惜しまれてよみぢゆかませともかくもありはつまじき人の世なれば

四月三日、鈍翁大人の過ぐる頃青山大御所にまうのぼりて御數寄屋拜見を許され給ひしと承り侍りて

わけのぼる雲井の空に天つ日のみ影ちかくもきみやありけむ

位山のぼり〳〵て天つ日の光りをきみや伏し拜みけむ

耳遠き老いにあらずばちか〳〵と玉のみ聲を君きかましや

天つ日の光りをうけてけふよりや君がゝしらの雪もとけなん

四月十七日、觀濤莊の床の間に清巖筆「不染世間法」とある一軸を拜して

世の中の色にそまらぬ山櫻白きや花の教なるらん

折しも前圃の蠶豆越しに山櫻今を盛りと咲き亂れてあれば

蠶豆のはたけの末に咲く花の梢見せたる山櫻かな

そら豆のゝびて花さく日はうらゝ春あたゝけくなりにけるかも

山櫻咲きいでゝよりつれ〴〵とながむる春の長閑なるかな

鰹の大漁ありきとて刺身の御馳走あるべしとあれば

時鳥いまだ啼かねど初かつを我にと召さす君が一聲

原叟茶碗の繪を手造ねにうつして

繪にうつす形もかくやと手つくねの茶わんのなりのなるにまかせて

四月二十四日雨、小田原へ赴く途上

めかれせし六日のほどにいつしかと青みわたれる野邊の色かな

ちが崎の松の木の間の桃の花けぶらひこめて降る春の雨

四月二十四日、掃雪臺の廣間の緣先にて、座に森川如春、田中親美氏在り、

雲掃ふうてなに結ぶ友垣のなかにまじりて聞く春の雨

ゆく春の雨にせゝらぎ岩越して急ぐと見えつ若葉すかして

打ち向ふ石垣山はけぶらひて庭の眞芝に春雨ぞ降る

木々の芽のみどりはいまだ淺けれどふかくもけぶる春の雨かな

この雨を冒して箱根に行く人の多ければ

はこね山みねのさくらにおくれじとゆくひと見えて春の雨ふる

はこね山小湧谷道みちもせに散る花ぬれて春雨ぞふる

夜雨莊にて

外つ國のリラの花色はる雨にとけてうすらぐ昨日今日かも

春雨の露おもげにも咲く花の山吹色のいよゝ濃きかな

植ゑおきしつゝじは咲きぬ白き花あかきうすきも處え顏に

あさみどり諸葉かさなるひま〳〵をぬきいでゝ咲く白玉椿

臭竹の去年の古葉にふる雨の靜かなる夜の春のうたゝね

めづらしときくや蛙の聲々をおもふ夜すがら春雨のふる

ぶりき屋におつるしづくの間を遠みかぞへてもきく春雨の音

朝起きのまづうれしきは春雨にぬれて妻よぶ蛙なりけり

石楠の一花咲ける薄紅に露のにじみて春雨のふる

雨きらふ朝の空にひゞかひて海鳴り高し小田原の里

翌朝歸京の途上

大森も大井も越えて品川や賤が垣根の山吹の花

四月二十七日、靖國神社大祭の朝、曉雲大人に從つて汽車を大船驛に棄て、共に歩して清水谷に向ふ。洞の細道を過ぐるに樫の落葉布きて履めば音あり。

事しげき世を目かれして住む人のまもりの關か洞の細道

夢境庵にて主人魯卿氏と對談しつゝ窓より前山を見るに新樹爽やかにして晩春初夏の眺め風薫り蛙聲戛々として野趣深く俗塵を絶つ。

清水谷奥の山田に友よびて蛙なくなり夏來にけらし

ころ〳〵と啼くもうらゝにゆく春の田中の草にすむ蛙哉

からころと蛙なくなり初夏の風わたりゆく田づらひゞきて

押しなびく若葉も光る初夏の田毎に競ひなく蛙哉

むかつをの若葉の木蔭みち見えて風とゝもにぞ人わたるなる

これの屋に語らふさまやみやびをの集ひとも見て過ぐるあきうど

これの屋に見やる外の面の夏景色涼しさぞ湧く御茶の一服

辭して田舍道をゆき〳〵て目は青葉の山を離れず、足は青草をふみ〳〵て杉木立にわけ入る。

ふみいるゝ鎌倉山の木下みちむかし追ひゆく心地こそすれ

藤原俊基朝臣の宮に詣づ。かの菊川の驛舍の柱に題して「古もかゝるためしをきく川のおなじ流れに身をや沈めむ」と詠ぜられしも憶ひ出でらるゝに、無死無生と觀念して鎌倉山の朝風に露と散り給ひし葛原岡は此處なりけむと、

もみぢ葉の一つに秋を知りてよりちるとさだめし身こそやすけれ

恨みつゝ葉うらかへして露ちりぬ葛原岡の秋の朝風
もみぢして落ちゆく秋のあはれをばおもひいりても見る若葉かな

扇ヶ谷に下り佐助稲荷に賽して踵を返し、夕つかた都門に入りぬ。

四月三十日、朝夜雨莊を出で熱海に一睡大人と邂逅、共に携へて三島街道を登り一里茶屋に休息す。庭前に殘櫻あり。

杖つきてのぼる山路の一里茶屋先づ目のやすむ山櫻かな

田代の女熱海に行商して歸るにあふ。曉天村をいで早朝峠を越ゆといふ。

竹の子を脊負ひて越すや熱海山朝雲わけてゆくは田代女
自ら走る車もやすみ茶屋むすぶ清水に息つくらしも

左へ山道をたどる。このあたり山鶯頻りに啼く。

鶯は谷の古巣にかへり啼く初夏の山越えてわがゆく
蕨多ければ

岡の邊の去年の枯草ぬきいでゝ小手かざしたる春のさ蕨
急げども摘まで歸らばさ蕨の山路越えしといかで知らせむ

歸途倶忘軒に一浴を試む

ひとあみのいでゆのあとの足るこゝろねむたさのみぞ增す許りなる

翌早朝觀濤莊に登るに壁に、森川如春氏筆若鮎の繪懸物を見て

岸のべの山吹さきぬ長良川瀨越え岩越え鮎登るらむ

既にして如春氏入り來らる。氏に接する毎に鳶飛魚躍の思ひすれば

おのづからに野に咲く花の白百合は近づきてよし遠く見てよし

氏に强請して、鮎圖、落花圖、螢圖を獲仍ち鈍翁の歌賛を乞へり。

五月十四日、夕方赴小田原途上

田のあぜのはりの並木に風そよぎわか葉すゞしき夏は來にけり
冬枯に松のみ見えし程が谷の岡ひと目にも青みわたれる

工場の人住む家の屋を越えて紫匂ふ桐の花雲
程か谷の田中みちゆく娘らもゆかなたになりて夏は來にけり
水引きし苗代小田の案山子さへ立ちてむかふる初夏の風
麥の穗も並み揃ひつゝ苗代に米の芽いでゝ夏は來にけり
初夏の風に乘り來るつばくらめ去年のふる巣にまたかへりけり
汽車みちの小石をわけて咲き出づるは月見草かも宵やみにして
大磯の夕べの岡の下蔭に咲き盛りたるえにしだの花
このみちのゆきにかへりにおのづから目にもなれたる池田農園
夕雲はひと村越えの山にせまりはや火ともりぬ二の宮の驛
あやにくにあすはも雨か夕映えの雲も動かずいと重げなり

十五日、夜雨莊に籠る

八重がすみ奥の箱根は隱ろひて湯本あたりや眉をひく山
ひとりすむわれになれてやせきれいの軒ばちかくも來て遊ぶなり
かしましとおもへどされど雀の子きなくなつかし庵の眞晝に
植ゑつけし眞芝は消えて青草のはびこる庭に春の雨ふる

舞ひ連るゝ胡蝶につれてうたふかやきくものどけき春鳥の聲
青葉風吹き通したる庵の内に肌さはやけく夏は來にけり
ひとり居の竹の下庵つれ〴〵に來なく小鳥とけふもくらしつ
早川の浦波の音も青葉ふく風とゝもにぞ窓にいりくる
梅の實のたま〳〵落つる音のして苔むす庭にさす日影かな

午後鈍翁大人をむかへて

きみをまつこゝろばかりは初戀のとにもかくにもいひがてぬかも
世にいづる門はしめても海越えておもひは馳せつ西伯利亞の山

十六日

雲垂れて五月雨ちかしいざや兒等さし木して置け枝どりもせよ
麥の穗はいまだも熟れず五月雨の空ちかしとや蛙なくなる

五月二十一日、夜雨莊に入る

けふくれば夏よそひして我庵をめぐる庭木のまちゐ顔なる
芍藥の一花さける薄紅の流れもぞする五月雨の庭

はまなすの赤きもあれどことしうゑのしろき花こそうらめづらしき
諸葉さしてゆふべをぐらき柿の本にあめよぶらしき蛙なくなり
あるじゐぬ庭にも色香漂ひて大山蓮の花咲きにけり
紫の花のゆかりもあとたえてすはうの丸葉あめそゝぐなり
雨にぬれてゆかりの色もひとしほの花のやさしき姫あやめぐさ
六日來ぬほどに八つ手のひろごりて雨きくばかりなりにけるかな
世をいとふためとはなしに都をばゝなれて今宵きく雨の音
ともし火をかゝげて見れば五月雨に楓のみづえうちなびきつゝ
浦波の音もきこえて雨くらき池にとき〳〵鳴く蛙かな

翌二十二日、夜雨莊にこもる

我庵は青葉がくれとなりにけり六日來ぬ間の初夏の頃
橘の花咲きにけり雨間見てほとゝぎす草根わけせんかも
しぬの根のとれどつきせぬしぬの根の岩をぬきても這ひ出でにけり
這ひのびし蔦の若葉のひるがへりかぜあたらしき夏となりにき
つれ〳〵にきく琴の音も青葉ふく風のもてくる程ぞゆかしき

去年の秋浦のはまゆふとりし實の芽ぶきし居れば土におろせり
軒ちかき老木の梅のひこばえにかぜ立ち騷ぎ雨もよひすも
ひねもすを庭めぐりする木下道なつかしからぬ蔭なかりけり
子雀はなど泣きくらすちゝとよぶほかにいふべき術をすべなみ
木苺の葉末重げに五月雨の晴るとも見えぬけふの空かな
隣より雨にぬれくる琴の音は青葉の垣もへだてざりけり
うち見やる青葉の垣は遠けれど隣の聲ぞちかく聞ゆる
庭の邊の花橘の香にゑひてなりとよもすも蜜蜂のむれ
靜かにして耳をすませば天地もゆらぐ許りの蜜蜂の音
ひるさがりなくゝだかけの一聲にとなり〳〵も應えてぞ呼ぶ
宵やみに一つがなけばまたひとつ蛙やあめを呼びかはすらむ

五月二十三日、朝鈍翁大人に謁して

きみ見んとあかときおきのわれなれどくれば長居の習はしにして
いつしかと長居になれて君がためのあかときおきもかひなかりけり

石垣山をのぞみて

麥の穂のいろつくまゝにあらはれて青葉の山も限りしらるゝ
やぶ越しのみちのうばらにつらなりてしろく見えつゝうつぎ花さく

五月二十六日、夕鈍翁大人の御相伴に平心庵の茶にまねかれて

とつくにのひとの言葉の花よ實よわがたわやめにもとむるは、これ
折しもあれ雨のうち水心あれや砂の長露地ちりもとゞめず
わらび折るひとのみかよふ足柄の山路おぼゆる鐵せんの花
黒船のいで入りしげき和泉なる堺の浦のいにしへおもほゆ
御茶杓もまつ御茶もまた松の花まつとしきくはうれしかりけり
わがためにふるとおぼえてきく雨のよるのこゝろぞたひらなりける
平けき心をさそふ夜の雨これやあるじのおもてなしぶり
あるじ居ぬ庵をわびしと我があとをおひかけてふる夜の雨かも

中宵雨を冒して夜雨莊に入る。

五月やみあやめもわかぬ庵のうちにいりてまさぐるともしびのつな
五月雨の庵さびしきひとりねのゆめさましたる雨もりの音
雨滴れの絶え間もあらでいつしかと夜半の嵐になりにけるかも

夜嵐に若葉もまゝ音すごくゆめなり難き庵のうちかな
夜の雨嵐とかはる曉の鐘の音ばかりすみわたるなり
鐘の音もあめにぬれ來る曉のゆめ驚かしふく嵐かな

余が手造ねの茶盌に銘せられんことを鈍翁に乞ふ、翁筆を把つて鷹が峯と書きつけ給へば
われ蓋裏に書いつけたる

鷹ケ峰とおほけなき名をつけられてわが手すさびもほんに恐悅

仍ち之れを平心庵主人に贈る。
六月十一日、夜雨莊に投じて

すく〳〵と生ひ立つさまのすこやけく竹の子ひでゝ風にさゆらぐ

翌　朝

起きいでゝ大人をやとはむねてやあらむかにかくまどふひとり居の朝

やがて掃雲臺にのぼれば原三溪氏より蓮花繪作りて與ふべしとのよき便りありきと承り侍りて

聞くだにもこゝろひらくるはちす葉をげに見んことのいつときたるゝ

鈍翁大人に示す

たづね來るひとの居るまは山ずみのきみが庵もうき世なりけり
たづね來て語らざりせば山の庵うき世の外の君があけくれ

翁に從ひて後山にのぼれば瓢簞池に杜若の花盛りなり

花の色をうつして動く池水のこゝろをさそふかきつばた哉
きぬ〳〵のわかれ惜しけみ我妹子が袖ふるらしきかきつばたかな
ちかよらば袖もやふれむかきつばたゝゞよそながら見てをかへらな

觀濤莊を過りて

きみが門の噴井の清水すゞしさのおもひやらるゝ夏は來にけり

夜雨莊にこもりてあるに人のわが歌を求むるあれば

伏庵にかくれ住む身のしぬびうた世にきこえんとあもひがけきや

强羅行

七月卅一日、早起掃雲臺に登る。廣間より遠く海上を望むに相豆の山にかけて夏霞たなびく

いさなとり海たちこむる夏がすみけふのあつさのおもはるゝかな

折ふし鎌倉より長井實氏、隣居回春亭主人貞子刀自來着、共に朝食の卓につく。主翁の求めに應じて刀自近詠を誌さるゝを見れば

明治神宮の御苑を拜觀して

花あやめみそなはしけむあづまやにけふぞかしこくわれもぬかづく
つりのいとたれたまひけむあとゝいふ池うつくしく睡蓮のさく

刀自歸られて後、翁が車に同乘して强羅に赴く。半時にして山莊に着く。山門に扁して雲外山莊とあり、三溪老の筆なり。門を入れば熊笹生ひ茂りて、岩に苔むし、森蔭石磴凉いと深し。

白雲の外にはとはぬ門の戸はあくもとざすも風のまに〳〵
蔭ふかき木立のなかの隱れ庵門はうき世の戸さしならまし

われ等に當てられし部屋の床に一休和尚筆雲外二字の一軸を拜して

山ふかみ雲の外なるきみが家は心の聲を聞くほかぞなき
白雲は麓にさりぬ風の來ておとなふきみが山ずみの庵
雲へだつ浮世をよその山の庵とふだにおづとおもひける哉

なには扨て措き庭前林中の岩の湯に導かれて主翁と共に浸る

そよ風の頬なでゝゆく岩の湯にひたりて仰ぐ夏木立かな

いそのかみふるきむかしをそのまゝに岩間の出湯わきいづるかも

浴後庭を逍遙して

夏木立楢の小枝のさゆらぎてはだえすゞしき庭めぐりかな

西隣瓜生大將獨居の庵を訪ひ參らせて

白雲の山の奥がに家居してなつとゝもにや世を忘るらん

莊に歸れば午食の用意整ひ、大將既に坐に在す。

床の一軸は古稀庵老主の莊主にあてられし文にして箱根遊行を謝するもの、余にとつて興特に深し。

食後一睡を試む。

谷川の音も聞こえて手枕の睡り誘ふ蟬時雨かな

さびしさのうちにとけいる我こゝろおもふことなき手枕のゆめ

睡さめ、起つて四邊をうかゞふに、實に青葉の深林のうちに小隱を爲し、溪に臨みて欄に倚れば、水は潺々、清風一榻、蜩の鳴く聲高し。

白雲の强羅の山ゆたぎち落ちて世に流れゆく水の音かも

はこね山奥の强羅の谷川の水に垂れたる白百合の花

山の庵のもの音のなき靜けさをふかめてもなく蜩の聲

岩原素骨氏突如として入來せらる。

主翁の掛物を懸け換へらるゝを見れば、大覺禪師筆居山二大字、印金表裝の古色よくかなふ。

鐵風呂に雲龍釜　　柴庵舊藏

水指　南蠻しめ切　　神尾舊藏

半ねら蓋

茶入　唐物こま　　銘手枕

茶杓　不昧作

茶碗　井戸

替　空中作信樂　銘つるしば

茶箱にて持ち出しあり。侍女花子嬢代點のかりそめの一服と雖も名幅、名器の數々正に常人の大茶會にも過ぎたり。

奇話珍談に一生命を拓ける素骨老匠の事とて快談湧くが如く洪笑絶ゆることなし、時の移るをわする。

心ゆく話にくれて夏の日のながきもしらぬ山の庵かな

夏山の木の香ふき來るそよ風に木の芽のにほひ深まさりつゝ

手放さぬこしの扇もいつしかにおき忘れつる山のすゞしさ

晩食後、涼に乘じて怪氣焔をあげ、話頭國際聯盟に及び、また滿洲建國に及ぶ。主翁の關心敬するに餘りあり。

老いさりて耳は浮世に遠けれど心は國を隔てざりけり

翌朝、曉起、清寂を領略して清風に坐す。

白雲も今朝は下り居ず木の間ふく風もすゞしき夏の山中

瓜生男を迎へて朝食の卓につく。大將病後自由に在せねど氣焔萬丈なり。

病いえて身は白雲の上にすむ山人らしも瓜生の翁

主翁の案内にて强羅公園を過ぎ、索道車に乘じて早雲臺にのぼる。

眼を放てば强羅は脚下に在り、前山白雲流る。

打向ふ心靜かにはるかなるかの白雲をおもひ見るかな

頓狂といへる茶屋の名おかしければ、翁に問へるに、主人の顏を見れば自ら釋然たるべしとあり。主人仍ちあらはる。

高笑ひ笑ひくづるゝ相好は實に頓狂のあるじなりけり

索道車に到れば、素骨氏其處に在り、ともに中强羅に下車して素骨庵に入る。

訥言筆瀧の繪に景樹歌贊の一軸の前に番茶一啜。高山の深居、松風と白雲とを侶として傲嘯する庵主の適意憶ふべし。

强羅山岩間の清水引き入れてたぎつ瀨を見るきみが庭かな

松風のこゝのみ音の高き庵夏をよそなる君が明くれ

辭してかへる。途に白雲洞を訪ふ。原三溪老の營む處なり。柴門鎖して主翁未だ來り住せず。巨巖の間纔かに細徑を通ず。幽棲愛すべし。白鹿湯を見る、境靜かに太古の如し。

大岩をうがちわきづる白鹿の湯はさながらの神代なりけり

古人のみともにたちてとひくれどあろじは見えず白雲の洞

雲外莊に着けばそば切の用意あり。瓜生男僉まづ入來、續いて素骨氏も加はり一座大に賑ふ。食後、素骨氏談に耳を傾く。突如として語り勿焉として破顏し給ふ。一坐絶倒す。

けふもまた聞きもあかなくおもしろき話の種のそこひしらずも

日ざかりにきくかな〳〵はあつしとてなきあぐるらむ利聲するどく

浴後の晩涼一入なり。折しも雨聲あり。驟雨來るやと一座顏色開く

蟬時雨やみて降り來る夕立のあめよびかはし蛙鳴くなり

雨忽ちやめど涼氣身にせまるを覺ゆ。

翌朝早起、朝風呂を試みて後食卓につけば、數しらぬ懸巣飛來して林間をわたる。

朝風に木の間をわたり來る懸巣庵をめぐりてかけずなくなり

翁が自働車に同乘して板橋の掃雲臺に着く。

さすたけのきみがめぐみに山の庵夏をわすれて二日すごしつ

と一首を奉りて厚意を謝し、夜雨莊に入る。

輕井澤なる鈍翁大人に寄せて

信濃なる淺間山風輕井澤おもひいでゝもすゞしかりけり

夏雲の立ちて日照りの都路は風さへやけて堪へがてぬかも

舗道せし大路小路も照りかへるあつさにけふは身ぞ焦れける

市中をかけめぐりて

あつさにもめげずひるまずへめぐりて自働くるまのうちは地獄よ

一睡老匠二十年來の暑休を廢して活動せらるゝを見て

老いさりて夏も休まぬ君見れば暑しとだにもいはれざりけり

輕井澤なる鈍翁大人へ文のはしに

あつしとてにげもゆかねど夕立の雨のふりきてすゞしかりけり

山水をくむとなけれどジヤズの音きゝて都の夕すゞみかな

きみはしも八十路はわすれ五とせのわらべあそびの日々の御茶事

また文の端に書きつけて送る

國をおもふ言多けれど國をおもふ人はすくなし悲しからずや

かくてしる國の大事を大事ぞと立つ人のなき今の世なるを

滿洲へ赴かんと思ひ立ちて文のはしに

秋風といざもろともに立ちいでゝまたもふみゝんもろこしの原

八月十六日夜、駒井長官の歸任を横濱驛頭に見送りて

風雲をやぶりてきみがきし日よりみやこはきみをたゝえて過ぎぬ

秋風とゝもに立ちてぞかへりゆくきみにおくらん萬代の聲

さかさまにおもひゝがめるしれものに心してゆけみちの中路を

滿洲に赴かんとして人に示す

雨嵐すぎにしあとのさまいかにゆきて見ましやもろこしの原

さきもりのいまだもつゝを手放さぬもろこしの原見てをかへらな

富永能雄氏滿洲移民論一篇を寄せらる、讀みもてゆくにわが宿論と一致するを見て喜びに堪へず

國民をうつしうゑてぞ大八洲十洲二十洲ひろみゆく道

八月二十一日、實朝公歌碑建設のため國見岳にのぼる

のぼり來れはさ霧吹きつけ肌はぬれて立ちぞかねつる國見山風

初島をこゝより見れば伊豆の海や沖のしらなみ磯洗ふなり

いにしへの歌をそのまゝ今ぞ見る沖の小島に浪のよりつゝ

八月二十四日、朝藤原邸に到る。床に門無關筆鹿背仙人の名幅を見て

馬を鹿にのりかへて世のたわれ言きかぬもよしやこれの山人

折しも朝顔の見事に咲きけるよと主人の喜びて在すれば

咲きいでゝ大人の朝顔にこ〳〵と見るもうれしき花の色かな

一夜老妓に逢ふ、その身上を喞つをきゝて憐みに堪へず

秋風に身のさびしさを鳴く虫の聲やまことのさけびならまし

かにかくにうつり氣しげきわたり鳥くれてぞ戀ふるもとの古巣を

とし月の流れに消えし戀文字のあとかたもなく老いにけるかな

とし月の立ちて消えにし夢のあとふりにし戀の行方知らずも

八月二十六日夜、蜂龍に於て全權大使主席隨員川越氏を送る宴にのぞむ。席上一妓あり、稍々和歌を解す。纏綿の情をのぶること切なり。宴半にして辭して西行の汽車に投ず。京都を過ぎ戲れに數首を彼妓に贈る。

相思ふ心々に面影を寫して逢ふぞうれしかりける

君がいふ言葉にそれとおもへども實らで散らん花多ければ

立ちわかれまた逢ふ時の何時ならむかくとや君もまちわぶらんか

われをさへ朝日とたのむ女郎花霜おく秋やつれなかるらむ

わかれ來て今ぞ越えける逢坂の關のこなたといふさへぞうき

なにをかくひそ〳〵語るきみやうきわれやつらきと人の問ふまで
あすは又さらに思ひのつもるらん昨日にまさるけふにつけても
われにむかひいかにせよとてきみはしも心のたけをなど語らざる

滿洲行

八月二十六日夜汽車にて東京を立つ。見送りにとて來し友と立ちながらに別れを告ぐ。心殘るおもひもすれど、直ぐに車中一睡の客となりて、二十七日朝江州に入りて目覺む。

青田吹く風の涼しき汽車の窓片帆入り來る湖沿ひのみち

湖國の別けて夏景色に浮雲の多きは湖水の蒸し昇ればなるべし。

朝晴れに浮雲多き湖の國比良も浮べり比叡も浮べり

京都にて繪葉書に書いつけて東京の友に送る。

たち別れ汽車に一夜を寢ての今朝都の人の數ならぬかな

夏雲の立つさまさへや山城の青田の原の日照あつしも

三の宮に下車して直ちに棧橋よりウスリー丸に乘り込む。既にして星野氏來着。

船路ゆく瀨戸の海つら夏たけて送る風あり迎ふ島あり

颱風の昨日過ぎて、今日快晴のよき船路は波立たず、夏の海の霞隔てゝ淡路島、四國の山々、攝播の諸山はもとより、大島小島應接に遑あらず。涼風を入れて安樂椅子に身を横たへ、冷茶を喫して纔かに睡魔を去りつゝ只管にこの勝景に見入る。

淡路島間近くよりて行く船のへ先に淡し四國島山

淡路島きれて四國の山せまる鳴戸の海かはろに見ゆるは

山低き空に卷き立つ夏雲の影動かして行く船路かも

秋の海の油流しの靜けきに波打立てゝゆく船路哉

島越えてまた島山の迎へ立つ海の中路をわが船のゆく

夏雲の白きは紙に薄墨の繪にかも似たる海の屋島は

夕日影淡にてりそふ伊豫の山ほのにまろらに海の上に立つ

二十八日朝早く六時といふに門司に着く。

昔おもふ壇の浦風輕ろやかに水門越す船をかすめてぞ吹く

朝風の寢起きの顏をなでゝゆく門司の港に船つきにけり

西東やがて別かるゝ諸船の錨おろせり門司の港は

此處にて園部博士、鐵井、富永の諸氏乘込む。神戸よりの小川市長、庵谷奉天商工會議所長、兒

玉氏等と共に皆知れる顔なり。

旅衣一つ船路に落ちあへる多くの顔を見知るうれしさ
めづらしき顔も交りて友垣の乗合船ぞたぬしかりける

滿員といふ盛況に賑々しく正午船出づ、海上いと靜かなり。

大船とへ先き揃へてたゆたへる對馬の沖のいさり船かも
大船の小搖れに慣れて波の音も涼しさ誘ふ我船路かも
沖遠き我船とめて語るかにラヂヲニウスの晝寢をさます

何事もなくて日暮る。夢靜かに目覺むれば、多島海をゆく船の行手に霧もなくて、碁布の小島大島、景觀稍々瀬戸内海に似たり。乘客悉くいでゝ見る。

名にしおふ今朝の船路は皆人の出でゝ見てゆく多島海上
わが船のゆく手の海に手遊びの如も散りばふ大島小島

既にして視界一點の遮るものなく雲海渺茫たり。

白波の折々立ちて海原は我船一つゆく許りなり
白波の濃藍の海にこゝかしこ立つ程風の涼しき船路
わがゆくや夏の船路のすゞしくて青海原に立つ波もなし

夕立の雨ふりしきる。

夕立の雨のつぶての船窓をうちてすぎゆく海の上の雲
吹きつくる風の音かも折々は船動かして雨の降り來る
波の音やゝ高まれば船搖れの程やいかにと見いる窓かな
船べりに寄する白波碎けては音たてゝ打つ我枕べを
大海へゝ先下りてまたあがるうねりにすゝみゆく船路哉
世に離り船に三日の旅枕睡り足らして身をやすめけり

惰眠三日、殘る一夜を熟睡して三十日朝七時大連港外着、八時上陸、遼東ホテルに投ず。樓上風轉た秋冷を覺ゆ。

滿洲に來て初秋のすゞしさを我身にしめし心地こそすれ

翌三十一日は凱旋將軍本庄前司令官を送る日なり。

古里に飾る錦のほまれをばたゝへて送る萬代の聲
大君のみ前に伏して皇軍のほまれをのぶる益良雄のをさ
ゼネバまで震ひ立てたる名も高き勳を帶びてかへる君かな

夜湖月といふに高田友吉氏にまねかれて

たま〳〵に逢ふたびきみと語るかなまじる白髪の殖えにけるよと

夜店見つゝそゞろありきに初秋のさよ風すゞし浪速通りは

九月一日、星ケ浦に假寓せる村田懿麿氏を訪ふ。氏は去秋滿洲事變と共に草蘆を出でさきつ日まで黑龍江省顧問として建國大業に功ある人なり。時事日に非なりといふ。

訪ひ來れば星ケ浦風胡藤（アカシア）の葉に鳴りて早や秋冷えのする

冬のころ君行きたりし齊々哈爾（チチハル）の吹雪嵐のさま聞かせませ

底しらぬ黑龍江（アムール）の國の果までも開けゆく世に逢ひにけるかな

おもふことなるもならずも益良雄のかへり來て伏す星ケ浦里

君がいふ治國の術も施すに時をえぬこそ甲斐なかりけれ

九月二日。

このあした秋冷覺え滿洲の空晴れあがり高く澄めるも

九月三日、關東廳の清水土木課長の厚意により川村博士と共に自動車にて牧の城の古址を視る。

牧の城むかしをたどる足もとの築地のかげにこほろぎのなく

石積みの唐めく城の內くるわ圍ひ蔽ひておほち茂れり

秋の日にくゞる廢墟の牧のしろ家鴨の立ちてわれを見守る

稍ゆきて近頃發掘されたる漢代の古墳を見る。

二たまわり千歲をゆめの器なる此奥津城の戸を開き見ん

くゞまりて入れば手に持つともし火の光りにうつる夢の世のさま

おもへども現には見ぬ古き世をうつゝにかへすこれの奥津城

九月六日、朝汽車にて奉天に向ふ。

勃海の風に送られ今朝立ちていで滿洲の國見せんかな

秋晴れの清しさに立つ今朝の旅歸るをいつとまつ人やある

高粱のうれて赤らむ野末より立つかと見ゆる新らしき國

金州を過ぎて

汽車の窓によりて見てゆく金州の山の尾に立つしるき記念碑

夕日影さすがにたけきものゝふの涙にくれて立ちしその丘

白雲の秋さびしさに泣く驢馬のつながれてあり畑の中道

望夫臺わが見て過ぐる秋風に立ち叫ぶごと汽車の笛なる

きび畑の中の野守が家圍む柳の梢風さやぐ見ゆ

高粱の秋の野末にむら山の立ちて迎ふる我汽車の旅

高粱の穂の赤らみのひとつらに見はるかす哉唐土か原
秋の雲み空に高し見はるかす野末をわけて來し汽車の道
生きん限り野飼の牛を見守りて日ねもす立てる野の人あはれ

匪賊の出沒日夜を問はず、驛々鐵條網を張り土嚢積みてあれば
土嚢積みて掩護の備へいかめしくどれの驛も仇まもりつゝ
仇守る夜も日も安き心なき人もたゞへん防人の苦は
騎馬の人も見わかぬまでに高粱の高きにかくれ仇よすとかや
高粱の穂を打ちたゝく支那人のうれたきさまや歌もうたはず

匪害を恐れて夜行車を避くればにや此汽車滿員なれど、檢札に際し錢出して乘車券を求め居るは
余と外人とのみなれば戲れに
一等の汽車は薩摩の守ばかり異國のわれは錢出して乘る
支那振りに貴き尊き人皆の錢も出さで乘るや此汽車

奉天に一泊して翌七日長春へ向ふ途に彼の北大營の近くを過ぎて
青柳の木籠りに吹く秋の風去年の一夜の强かりしかな
去年の秋一夜嵐のおもひ出の果敢なきものは榮枯なりけり

鐵嶺の古塔昔ながらに立つを見て
草山の上に立ちたる高塔の影もふりたりわれもさこそは
昔見しさまはかはらず鐵嶺の町の土塀に草生ひにつゝ

支那振りのめづらにもあるかうなゐ子は豚と遊びて土を這ひつゝ
川柳みちの並木の打續き綠一目のさも支那の國
高粱の穂の赤らみに夕日照り廣らなる野は今か燃ゆらん
靜かにも入日の赤き野末より湧き立つ雲のくきやかにして
豆の畑につゞく陸稻の穂は垂れてものおもふらん秋づきにけり
ちゞれ毛のみめうつくしきろしあの子サービスすなり汽車の食堂

日暮新京着、ヤマトホテルに投ず。
菊月のいまだ十日の朝もよひ雨霧らひして薄ら寒しも
秋は來ぬアシナの葉風打そよぎ青空高く白雲の飛ぶ
長白の山並越えて朝の日のさし入りにけり我窓のうち
枕べに照りこむ朝の日もうれし豐榮登るその朝日影

新政府に奉仕するものゝ野球試合を見るに支那人は加はらず、いとものさびし。

朝晴れに野に球投げて遊ぶ兒等見れば皆々やまとはらから
支那の兒はなど遊ばずや球なげて大和をの子にうちまじりても

府内の同胞相排するを嘆じて語るもの實に支那の識者なりければ

うたてしや一つ畑の瓜茄子友をうりても我名なすとは

久方振りに駒井氏を視る。四面楚歌裡に在りて、光風霽月、依々として毅々たり。

新らしき國の柱と打ち仰ぐきみが力のふとしきろかも

匪害頻々、東支南部線最も甚だし。折しも吉林に赴かんとして賊來の情報しげし。知人戒めて其行をとゞむ。

吉林へゆくと定めし朝たより聞くもうたてし汽車通はずと

友が家を訪ひて一とせ吉林のわびしさ見んとおもひしものを

仇をなす醜の奴等の狂ひざまきゝて弔ふ横死の人を

新京に賊來の流言ありて支那人の落ちつかぬこと言語に絶す。

匪賊來と噂傳へておもへばか人のあゆみも落つかぬかも

舊友某支那人來訪、新政治化擧らずとて爲めに公憤にわなゝく、不平、不服察するに餘りあり。

あまされて世に時をえぬともがらのかこち顔にも涙流るゝ

愁ひつゝ時うしなひし泣言のかの支那の人見るさへぞうき

今次一歴一として光明を見ず、深憂禁ずべからざるものあり。

浮雲のおもひ重ねてやすからぬ國のゆくへを思ふ旅かな

わが憂ひむなしからざる悲を誰れにいはましこの悲しびを

政府に仕ふる若き學徒の來つて訴ふるに

世のために憤らしも若人のわなゝきていふそのしのび言

九月十四日、退京に際し駒井氏に示す。

君が身をあげつらふ聲を聞きあきてけさ立つあとに心ひかるゝ

さす竹の君を千里の外におきてわれと心を慰めて立つ

安奉線の旅

九月十九日、朝汽車にて奉天を立つ。せめて晝汽車は匪害少ければとてなり。石橋子あたり所見川の邊に牛は寢ねつゝ月と日を仰ぐほかなき谷合の里

見るものいと靜謐なれども祁家堡驛に凡四百の太刀會匪出で巡査一名殺され、巡警一名重傷せりと傳ふ。本溪湖にて多數の巡査乘り込む。何れも太刀を帶び、拳銃を携へ、或は機關銃或は小銃

を持つ。

我汽車に防人あまた筒持ちていかしく乘れり仇まもるとて

祁家堡の山に匪賊の影見ゆとしらせに勇むわが防人は

これより稍心やすし。小き驛は家族のものを大驛へ移し、男子のみ死守する態、涙なくして看過する能はず。

やからをばほかに移しておのが身のひとつを楯とまもるうまや路

鐵條網どれのうまやも張り詰めてまもるはらから肝はりにつゝ

橋頭より連山闘のあたり秋色山を埋めて野葡萄の紅葉燃ゆるが如し。

初霜のはやおきそめしもぢみ葉の野山うづむる連山の闘

祁家堡に着けば匪賊は後山に退きしとて、討伐に來し守備兵は到着の巡査部隊に委ねて歸營の列車に乘りて出で立つ。

名にし負ふ太刀會匪槍を提げて突きすゝみ來といふにあらずや

必ずも仇を討たずば同じ世に生きじとふなる太刀會匪

太刀會は一種の宗教團體にして勇猛限りなしといふ。我汽車の難を免かれしを喜ぶ。

豆黍實りて秋まさに酣に、野菊點々として旅情を牽く。牛は睡り、豚は遊び、人は氣永に煙管を

くわへたるさま匪賊をよその平和境なり。

鷄頭の赤き並べる庭の内にひる靜かなるにはとりの聲

家苞を負ひつゝ支那の娘をつれて畑の中路ゆく老爺かも

立話し支那の老爺もこの頃の世の樣如何に聞きや知るらむ

立ちながらさも落付きて支那の人なにを語るか仇よすとふに

道の邊の野菊に心ひかれてぞゆく甲斐あれや秋の旅路は

我汽車の幾山越えてゆくけふは遠近秋の色のみにして

うち案ぜしこともなくて高麗門驛に着く。

唐人の昔は駒をとゞめけん高麗門にわれつきにけり

紅葉の名所なる鳳凰城の山もちかければ、そゞろに曾遊をおもひ浮べてゆくに、名に負ふ五龍背の山昔ながらに巍々たり。

昔わがよぢのぼりてし秋の山むかへ立つらし鳳凰の驛

うちくもる夕の空にたつ見えてこゞし岩根の奇しき山かも

暮色漸くせまる。

稻の穗の實り垂れつゝ豐秋をとはゞさりとぞいひ顏にして

川柳それといふべの野に見えて驢馬の嘶きかすかなるかな
豚のむれ追ふ鞭先きの赤き裂見のやさしもよ豚追ふ童
夕風はポプラの葉裏かへしつゝみにさやりゆく安東の驛

舊友數氏に迎へられて安東着、夜行車迄の間を旗亭に會飲す。

事もなくけふの旅路をこゝに着きて匪賊語りの酒に醉ふかな
見きゝせしかのあたらしき國の樣かたりあふ間も憂ふるやきみ
もろこしの原に二十日の旅寢して夕となれは大和しおもほゆ
機關銃をうち守りつゝ仇がうつ火玉に死せしあはれその人

諸友の見送りをうけて立つ。

朝鮮一過

鴨綠江を渡りて

ありなれの河をわたりて浦安の國はこゝぞとおもひけるかな

一睡して目覺むれば既に海城を過ぎたり。

雨霧らひ薄雲垂れて韓の山見るさへなごむ我心かな

白妙の韓の人かも朝山の木の間をわけて來向ふが見ゆ
松植ゑてはたとせ過ぎぬ韓の山並み立つ山は皆綠なり
一里は低くまろらに萱葺きの韓の屋に干す唐辛子かも
くゞまりていねしがごとも靜かなる田居の藁屋にふくべまろべる
白妙の韓衣きて籠をさげて稻田の小みちゆくは誰が子ぞ
朝川をかち渉る見ゆから人の白妙衣裾かゝげつゝ

朝九時京城着。夕諸友と幾羅具に會食。座に去秋大阪より同車せしめ若といふあり、また晉丸といふを始めて見る。戯れに

去年の秋汽車に二日の見知顏あはせ語れば夜ぞ更けにける
くはし女の胸も高鳴る晉丸の柔肌をかも誰が觸れて知る

二十二日、朝汽車にて京城發。漢江を渡りて

大河の水はたゆたひ砂原の日射し弱くも秋たけにけり

みち〳〵詠歌にことよせて閑を消す。

我汽車の稻田十里を飛ぶ蜻蛉豐のみのりを誇りかにして
來る度に嘆きても見るはげ山の骨あらはれて秋の日は照る

なでしこの花の赤きが叢に咲き出でゝ飛ぶ蝶一つあり
山低く晴れて一日の汽車のみち稲田百里は秋づきにけり
赤々と藁屋染め干す唐辛子からの田舍の秋の色かも
ポプラ木の並み立つあたり砂川の水かれて秋やゝに老いんとす
稗抜くと稲田をわけて韓乙女秋の陽に立ついぢらしきかも
負ひ荷して韓の童のなに運ぶ籠に砂もりて道つくるとや
やせて立つポプラの里の田居の家伏して藁屋の見えかくれする
山もとの韓家の翁ひねもすを煙管くはへて鳴子引くなり
雀立つ門田の鳴子引く翁ふるき世おもふ烏帽子白衣
村市に出買ひの人か牽かれゆく牛もなれたり里の細みち
やせ山のさびしきかなや越えゆけばすゞろにからの國にありけり
ふるき國土からしてやたなつもの實のりすくなに見えにける哉
土かれて民つかれたる韓の國旅人の泪すゞろなりけり
山を見てかのはげ山の赤土の不毛の山に心痛むも
やせ細るポプラに風の高鳴りて韓の乙女のもすそ吹くなり

手をふりて衣冠の人のともつれて青田の原の道急ぐなり
身を反りて手をふりつゝも大あしのからの女の男さびすも
こゝにきて見の始めなるひと構へ瓦房の家の奈良めきにたる
夕暗の靜けき底に光りつゝ洛東江の流れ沈めり

釜山にて德壽丸に乘る。

山陰の旅

一睡の間に渡海して二十二日朝七時下の關着。七時半同地發萩に向ふ。雨摸糊たり。道は海沿ひにして日本海を望む。

長門のや外濱道を雨にぬれてゆく旅衣秋冷えのする。
長門のや外濱傳ひゆく道に潮ふき立てゝ浪のよるなり
雨霧ふ沖の彼方へ磯馴松の木々わたりゆくひと時雨哉
しほ垂れて芙蓉の花の咲く秋の雨しづかなる海沿ひの村
海見つゝ幾村里をわたりゆく雨の長門の外濱のみち

黄波戸といふ驛あり、相對して青海島といふあり、奇巖あり其景よし。

名をとへば黄波戸といへど青海島心を染むる波の色かな

雨ぎりはよき程屋根をかくしけり繪にかも似たる薄墨の山

萩の町外れに松蔭神社に賽し、松下村塾を見る。

古き世を思ひ出でつゝ來て見れば秋雨寒くこほろぎの鳴く

松下のふみ屋のあとを來てみんとおもひしことのはやもみそとせ

みそとせの望みはたしてぬかづきぬ秋しづかなる松蔭の宮

秋の雨しづかに聞きてたゞずめば昔のことも今の世の中

ひとり聞く軒の玉水ふるき世の音のかそけく我耳にしむ

松下のみちふるけれどふみくれば日にあたらしき心地こそすれ

越ケ濱といふに晝食して自動車にて宇田郷に向ふ。海沿ひに島あり、青松生ふ、景いとよし。宇田郷より大狩小狩峠を登るに道は九折して危崖の上を走る。

宇田の郷越えて山路のつゞらをり折々見ゆる海の色かな

峠を下れば須佐の驛なり。これより汽車にて益田に向ふ。

磯馴松こなたにむきて荒海の風にそむかぬ姿ゆかしも

荒磯の隱れ岩かも白波のよりてくづれて立ち騒ぎつゝ

砂濱の遠き空より雲垂れて沖ほのぐらし石見の海は

益田より夜となり、夜半出雲大社に着、竹野屋に投ず。翌二十三日秋季皇靈祭日、齋戒沐浴して大社に詣ず。古代日本の王者大國主命を祀る處なり。

秋冷の今朝は身にしむ出雲なる杵築の宮の大前にして

日の御崎の神社へも賽して松江行の電車に乘る。松崎水亭といへる穴道湖畔の旗亭に憩ふ。水鄕の情趣豐かなり。

湖の國の秋早きかも吹き渡るかぜのつめたき水亭に居り

ひるさがり眞帆と片帆の流れゆく湖見送りて水亭に立つ

自動車を賃して有澤山莊に登り、不味侯の作らしめられしといふ菅田庵及び明々庵を視る。菅田庵の庭に老松數株あり。景致譬へ難し。

老松のまだ若松の昔よりいまにめでたき山の庵かな

千鳥城五層樓に登る。閣上の眺望絶觀なり。

冬されば鳴くや千鳥の大城にのぼり見おろす松江大橋

小泉八雲氏舊居を見て水亭に歸る。夜に入つて湖色秋冷を帶び、灯影水に映じ、虫聲庭に滿つ。

虫の聲すゞろに悲し波もいね夜もふけわたる湖沿ひの庭

湖の岸の灯影のあきと〻もにふかくもうつる水の上かな

終列車に投じて大阪に向ふ。

寒拾

老來らばうづくまりてのみもあるべきに、八十にして牙根固く、九十といふも遠からず、百歳必ず生き給ふべし。健氣なるは鈍翁なる哉。翁が强羅山莊近く住める某の若老あり、一日翁を訪ひていへりける、八十翁土方久元老を煩はして八十の書を獲、之れを楣間に揭げつ。今翁は更らに五歳の兄たり、乞ふ八十五の書を與へよと、復た他をいはず。翁卽ち筆を把つて八十五の書を作る。われ之れを聞いて寒山と拾得とをおもふ。松風颯々境自ら相似たり。

濱木棉

紀の國なる友に文してかの三熊野の浦のはまゆふ二本を得、我庵に移し植ゑしは二とせ前なりき。まち〳〵し花の咲きければ

海山を幾重へだてしこゝにしもうらの濱ゆふ花咲きにけり

實のりしを鎌倉なる長井實氏に贈りけるが、實生せしよとの知らせを得て

わが庭もきみが園生も三熊野のうらなく咲くかはまゆふの花

このたよりに、取りおきし實を見るに既に芽ぶきし居れば

去年の秋浦のはまゆふとりし實のめぶきて土を戀ひぬべらなり

駒井德三君を迎ふるの詞

昨日君が行を東京驛頭に送るや衷情寫さんとして筆滯り、纔かに詠歌によりて自らを慰めき。半歳の轉變その跡漠たりと雖も、煌々たる旭旗の下、北滿の荒野に死せずんば實に男子たるに恥づと、健氣なる哉征夫の勇や。今や禾黍の歌聞くこと稀れに王孫芳草の獨り香を放つあり。天驕を剪つて舊業の光復成る。君が心、一寸の鐵、傾倒此に到る。葵藿の一誠、君を措きて復た誰れかあらむ。今君を羽根田に迎ふ、一見依然發程の時に似たり。孤身劍に倚つて天涯に向ひ、歸鞍仙鶴に換へて天空を翔破して來る。誰れか期して待たん。手を握れば雙涙珠の如し。

建國創業、這般の苦、切に君に問へば君破顏却つて其樂を說く。新京城頭新宮裡、巫雲君が望む所に非ず。保境安民これ萬望の趨く所、君之を計つて天の負托に應ぜんとするのみ。囑目の景、碧草綠波、恰も無限の意を寄せて、君が光風霽月の情を稱ふるに似たり。

君と訣別の夜、感懷轉た凄涼、爾來夢裡君を遼東に追ふ。新紙報ずる每に悄然として悵望せずん

ばあらず。君や曠識千古に超ゆと雖も草莽に沈淪して敢えて世聞を求めず、況んや利達をや。時艱に逢着して臺閣の偉才手を措いて思案し、遂に民野に求めて偶々君を獲たり。君の狂瀾を既倒に回す、宜なり高蹈深晦二十餘年、渾身の善謀を擧げて克く千歳不磨の業を遂げ、鴻業堂々前史を壓す。帝京幾夜君を迎ふるの宴、都門の士女盡く盛名を記し、祖國前衞の歌を唱へ頭を擧げて滿洲を望む。思ひ君に係ればなり。

愛兒迎ふれども敢えて慈親の情を盡さず。朝に元老を訪ひ夕べに閣臣と會し、一心唯滿洲國是を說いて寸暇なし。王者信認を傾け、國民思慕敦し。社稷の安危一に君に在り。自愛加餐夫れこれを勗めよ。われ君が盛業を讃せんと欲すれども、千萬言尙よく盡すところにあらず、聊か蕪歌を賦して自ら歎を永くす。

きみさりしあとのみやこのうらさびて夜毎さ迷ふもろこしの原
ひとりゆくきみが身に佩くみつるぎもきほひかねけん君が利心
はたちあまり幾とし月のたぢからをこめてはきけんきみがみつるぎ
きみが佩くまことのつるぎ光る代の蔭にぞ眠る三千よろづ民
日のみ旗さき立すゝむ益良雄のかばねうづめん唐土の原
亡びたる國一面のきびの畑かなしき歌やきゝあきにけむ
千里ゆく雲居の駒のいなゝきにあけそめにけむ國の曙
日廻りの花咲き向ふ時の來て王者ふたゝびしろしめす國
もろ手あげてわれひといはふ國肇め終りなき代の礎やきみ
大空のひろきは君が心にてめぐみおほはんもろこしの原
大海のふかきは君が情にておほしたてなん國の行末
三千よろづ民の心を身ひとつにつなぐまことやゝまと魂
國民のためにと君が傾けし心はかたし黑金に似て
知らせ文見る度おもひはるかなる君を戀ひつゝ暮れし一とせ
家をすて唯一筋にゆく道の夕日の影に君泣きつらむ
すがるにも居まさぬ親を恨む兒は涙や玉と流れいづらむ
君を迎ふ都の人の數ならで思ひはるかに窓による誰れ
ちゝのみのちゝをむかふる兒等にあへどまさめには見ずゆきすぐる君
きみ待つと羽根田の場の草もそよぎ海さへ波の立さわぎつゝ
天かける駒井の君よあかねさす都の空にけふぞ嘶け
君を思ふ心うつさん筆もがなうつすとすれば千々にみだれて

送駒井長官歸新京詞

駒井君の都入りは實に風塵三尺劍、社稷一布衣の感深かりき。世人翹望未だ君を知らざる者も一度逢うて讃辭を吝まず、是れ君が氣魄志操に魅せられてなりけり。二度び相語るや君が膽略識度を敬し且つ服す。斯くして君は滯京旬日にして滿洲國是を說いて爛舌息ます、遂に承認促進を達成して今將に新京に歸らんとす。別れに臨んで聊か告げんとすることあり。支那民族は事大主義なり、史乘敎ふる如くんば强者の權に服從する外高遠なる理想なし。さればこの物質的勢力の獨往する邦土を統卒するに、治安以上の善政なきことを牢記せよ、これ其一なり。日滿經濟統制とは何ぞや、他なし、滿洲の資源を開發して日本の產業集中をたすけ、依て以て日本の勞力輸出に便すると共に、日本は資源の天利に乏し、之れを滿洲より補ふは共に滿洲の利とする所ならずんばあらず。而して滿洲の勞力を日本に輸入するが如きは角を矯めて牛を殺すに類す。これ君が牢記すべき二なり。大和民族の增殖今日の如きは未だ前史に見ざる處、勞力輸出に加へて更らに民族の移植を謀ることの絕對必要となりつゝあり。スラブ族東漸の跡を見ば思ひ半ばに過ぎん。由來大策の土なく二十年間此事を忘る。君が牢記すべき三なり。われ匆卒の際此三項を擧げて君に倚賴す。君朝に歸るの日、國策を傾げて盡瘁するを疑はずと雖も、古來忠義空言の本場に於て、滿洲新祚を永久ならしむるの業また容易ならざるべし。趨競の徒、集まるとも徒らに相附托するのみ。願はくば君勇往邁進、天下の治化を念とせよ。王孤若しと雖も萬乘の才なりと聞く、雄飛高翔せんとすれば雪虐霜打また辭すべきにあらず。君や實才宏器、努めて輔弼の責を重んじまた眼前の苟安を貪る勿れ。外大蘇と接壤し折衝の事漸く繁からんとす、必ず親善の道を誤る勿れ。內精勵治を爲し、諸政擧らば、四百州は自ら來り投ぜんのみ。君が志業日に就り月に奬み歲と共に止るなけん。樹高ければ風鳴る、嫉視君を陷擠せんとするものあり。道途の說頻々として決して坦夷ならざるを知る。乞ふ自警自愛せよ。

滿洲劫略

一寒書生刺を通じて强ひて面會を求む。主人引いて見る。彼れ職を關東廳に奉ぜんとして司長たる主人に請ふ所あらんとするなり。主人曰く關東州は猫額の地、君か驥足を伸ぶるに足らず、乞ふ農商務省に職を奉ぜよ、われ斡旋の勞を吝まずと。書生憤然として曰く、斯の如くんば豈夫子を煩はさんや、主人曰く、職を求むるものにして此言あるは如何ぞや、書生色をなして曰く、滿洲を劫略し以て邦人の移植に備へ、兼ねて資源の開發を謀らざる可からず、任に關東州を望むは其策謀に便なるが爲のみと、數千百言說いて大河を決するが如し。主人慇懃自重を奬む。書生意

氣軒昂、言辭矯激、怫然として去る。後書生職を滿鐵會社に奉じ、屢々主人を視る。主人懇切至言を忘らず、後主人製鐵所長官となるや、偶々書生南支漂游の客となる。主人誘掖大に努め、私帑を割いてその事をたすく。壬申初秋の一日、客來つて早稲田鶴卷町の白仁武氏を訪ふものあり。主人迎へて我兒の如く手を握つて喜び且つ笑ふ。この喜びこの笑ひ何人か其眞意を解せん。客は滿洲國總務長官駒井德三其人なり。其室は嘗て滿洲劫略を論ぜし處、爾來歲月二十餘年流る。

いでゝむかふあろじやいかにいにしへの言をはたしてきたりとふ友
まんしうをとりて喰はんと大口をたゝきしほどのきみにぞありける
きもむかふこゝろからなる語らひのうれしきけふにあひにけるかな

月下の宴

去秋奉天の風雲今日青天白日を生み來り、禍亂其源を斷ち、生民塗炭を免かる。偉業の參劃我駒井君その多きに居る。君若くして敎を隈川先生に享く。先生青眼迎へて東亞の歸結を語り、遠謀達識を傾けて餘さず。星霜悠々二十餘年。今宵先生を安房より邀へ、荒野寒天戰塵の跡を語り笑つて杯を献じて舊恩を謝し、志業の成果を報ず。太郎山下君と余と席に陪してこの劇的一場面を見る。仰げば中空皓月高く、清風徐ろに坐に入る。

はたとせのむかしにかへるこのタべうれしく月もめぐり來にけり
くみかはす酒の香高きいさをしをたゝえてかたるはたとせのゆめ
ゆめにあらずまことなりけり新らしきくにのはじめをまさ目にぞ見る
うたかたの安房の國よりはるゞ〳〵にきみをむかへし人のよろこび
かたりつきぬ世のかはりざまかはらぬはかくとざだめしものゝふのむね
からやまとへだてなきよの月高くかたりつがばやきみがいさをし

鶴見丘

早川千吉郎氏滿鐵社長となるや、駒井君民間に在りて策を献ずること數次、直言して憚らず、而して氏よく之れを採る。これ君が一身のためにいふにあらざればなり。君はこの信認を鳴謝しき。滿洲國就りて君が上京するや總持寺畔に氏の墓を展して夕陽影裡に立つ。

夕日影落ちゆく丘にたゞずみてしるしの石にきみなにかいふ
きたり告ぐるきみが誠の力にはしるしの石もうなづきにけむ

旅愁

南大將の駒井君を拔擢して、任に關東軍財務顧問として遼寧に赴かしむるや、之れを閣議に諮る。

而して駒井君を說くものは大將と思ひきや、準之助井上氏ならんとは。蓋し駒井君の井上氏の知己たる既に年あればなり。斯くして去秋君の帝京を距るに臨みて遂に井上氏に辭せず。焉ぞ知らん、井上氏兇手に斃れて墓木新たに、帝國ホテルの一室に堪へ難き愁恨を語る駒井君を見んとは

かへりこぬ人をしぬべば梓弓張りし心もたゆまざらめや

ますらをの肝張りにつゝ立ちかへる都さびしき物語かな

馬占山將軍を憶ふ

呼び慣れぬ名の馬占山ときけば常陸山、駒ケ岳と同じく見知らぬ國の山の名なりと速斷するも無理からず。それ丈に彼れの名を知らざるもの無き迄に喧傳せられき、同時に馬將軍こそ滿洲事變が生みし幻滅の英雄なりけれ。海倫の寒驛に男の馬占山を誓つて轉向を期せし彼れは男の中の男なりきとなむ。起請誓紙を作るを要せず、我言を信ぜよと言ひ放つて憚からざりしは、强ち將軍が目に一丁字なきが故のみに非りしなり。建國協議に諸星集まりし時盛宴を張る。某一卷を出して記念の書を求む。臧、張、得意の筆を揮ひ、凞哈また快筆を試みて後曰く、占山文字を知らず、乞ふ馬の繪を作つて之に代へよと、呵々大笑す。占山默々自署三大字を作る、元より金釘流なり。悠然投筆の彼れが顏には激色見え、憤怒いふ可からざるものあるに似たり。心親に期すらく、此

輩俱に事を爲すべからずと。

爾來北滿の荒野に虎を放ちたるが如く、關東軍を擧げて追討に專らなること數閱月、頃日彼れ戰死の報を聞きひそかに梟勇が末路を憐れんで其靈を弔ふ。

鈍翁遺言狀之事

昭和壬申四月三日午后飯後庵に鈍翁大人を待ち奉る。仍ち床に松花堂筆俊成卿の歌、またや見む交野のみのゝ櫻狩花の雪ちる春の曙、の一軸をかけて

この春の初花暦けふかけて先づくる君がながめにぞする

と詠じて翁に示しゝに、鈍翁この一軸をよろこび御覽じ書きつけ給へる。

余が最も敬愛する昭乘翁の筆になれる花の歌の懸物を獲しとて不時の茶に招かれ此獲物のあまりに羨しさに　於飯後庵　雲外

うらやまし床に匂へる松の花あるじ顏してわれをまつとは

依りて

さす竹の君まつ花の一枝に色香そへたる人の言の葉

とよみいでゝ、この一軸の翁の觀賞を博せしをうちよろこびしが、更に

伏庵の我茶の湯にぞふさはしき色なき松の花の一枝

かへり見る人しなけれどわがためにみやびのともよこの松の花

とひそかに愛惜の情をのべけるに翁の御かへし文に

今年櫻の時節尙御使用の後御讓受相かなひ候はゞこよなき幸と存候いつも我儘御海恕是祈る云々

初　五

さらば惺々翁の筆のあと山程も積める掃雲臺の寶藏へこの一軸送り屆けん前夜、近藤外卷氏夫妻其他をまねきて名殘の一服を喫しけるに

あすよりは雲のうてなに咲く花を今宵ばかりの宿にながめん

あくる朝鈍翁の許へ送り奉るに、程なく翁より御文あり、

喜びの驗までに腰衣幷に修業服一具相呈度夫々註文仕候今仕立中故出來次第御屆可申上候又此幅は小生世を去り候節は遺物として貴兄へ差出候事を掛物に認め置き候、左樣御承知可被下候もしあとのもの等閑に附し居候はゞ此書狀をもつて御申込被下度候云々

壬申四月十三日

これなん鈍翁の遺言狀とぞ覺えし。

さればとよ、名古屋の和散會員諸氏が太郎庵の遺言狀を見つけ出して、翁に呈せられしを見しが、それには鈍太郎茶碗の處分を始め諸道具一々明細に分配方を記しありて、流石は太郎庵よと感じあへるが翁も亦斯ることより氣づき給ひしにや。ともかくも鈍翁の遺言狀のこれあるは未曾有の珍事とや申すべき。若し夫れ遺言狀の効果を云々するは鬼の嗤ひを招く恐もあれば姑く云はず、たゞ御布施の功德をのみ讃えて

ありがたやのりの衣に身をかへて六日のちりをひと日拂はむ

とよみて返し奉る。

觀濤莊の床に原三溪氏筆清曉白蓮の繪を見て

世の塵のいまだもたゝぬあかときをわがよとさける白はすの花

ほ〻の〻と花のはちすの白きのみゝえてうすらぐ池の朝もや

繪筆もつ心をいかに清めてかこのしらはすはなりいでにけむ

三溪先生の畵を求むる文

三溪先生とは何人ぞや。余嘗て其書と畵とを見つれども未だその貌と業とを知らず矣。われ先生に於て全く所緣なきなり。曩きに先生筆老媼茶廛の圖を睹、今また清曉白蓮の繪に接す。神韻の

縹渺たるに對し清興寔に禁じ難く、新趣竟に忘るべからず。顧ておもふ、我が小庵の一壁、翼くば雨中の幽趣を先生の餘筆に獲て以て掩關閑坐の清侶と爲さん事を。われその人を識らずして敢へて紊りに其筆を求めんはまことに禮といふべからず、而かも尙求めてやまざるは欣慕已む能はざるもの之を如何んとする能はざればなり。

たゞたのむしめじが原のおふで草我が言の葉のあらん限りは
我庵の本尊かけよともろともになくねあはせよ山ほとゝぎす
三つの溪ふかき山路のけはしきにかけてぞたのむ峰の板はし

三溪先生の書畵を求むる一文を草して鈍翁大人に示し參らす

さんけいの功德をわれに得させよと御本山より御聲あらばや

銘雲隱れ茶碗之記

雲隱れといふ卷の名のみのこりてその詞なきは紫女のまうけたるすさびにやあるらむ。鈍翁いま余が手造ねの茶碗に雲隱れと銘し給ふもその說なきはかの源語に因り給へるにや。夜半の月のみは雲隱れて人の恨みをまねけども、昔雪峯は據つて以て大悟に徹せりとなむ。據る處に因みて銘すといはゞ雲も雪も隔てやはある。されば雲を雪にかへてさとれとこそ推し測り奉るもことわりか什麼生。

茶きよう

某の茶人田舍に住みて往來不便なりし程に、交友の切なる求めによりて市に家居せしかど、猶電話といふものを設けず、おほよそ世事に關らざらんとするなりけり。

是に於て交友相議して電話を購うて贈り、且つは新居の成れるを祝し、兼て彼我通信の重寶たらしめんとす。某固辭して受けず、電話をもつて茶信を辨ぜば、我茶事をもつてけいひんに準らふに似たり、茶趣を損するこれより甚しきはなしと。取次ぎを營業とする茶狂子といふものあり、幹旋大に勗むれども、取つき樣もなしと本山に泣訴しければ、さんけいの老爺も加はりて、先づ茶きようにはり金を引かぬさきより混線し實にも茶きようのとまどひやこれ

虫よけ

夜雨莊のゆふべ〳〵電燈にむらがり來る夏虫のいとちさき數々、蚊遣り線香の煙に醉ひて落つる

もの落花の雨の如し。硯の海はもとより、する墨にも交りて、あたりを汚すこと甚しく、煩はしき限りなり。この頃回春亭の主人貞子刀自の發明せられしとて賜はれる虫受け蔽ひを電燈にかけ用ふるに、虫は悉く其内に收まりてあたりいと清らなれば、讀み書きの夏の夜のおもしろく、更けにけるをも知らで過ぎ、ふと蔽ひを見れば、無數の虫の亡骸ぞみちたりける。

ともし火のもとに落ち來る夏虫のいのちみじかき夜ぞふけにける

夏の夜のみじかきいのちつもりてはむしのむくろの山となりにき

ふみをよむまどのともし火夏虫をよきてうれしもきみがたくみに

飯後庵

隣居鈍翁の在すによりてこそわが飯後庵を知る人は知れ。されど客のために清掃をつとめず、また嘗て蓬門を開かんとせず、唯だ來り訪ふものを迎へて謝せざるのみ。

鈍翁われに授くるに法衣一着を以てせらる。俗骸を包むことのをこがましけれど、之を被て爐邊に旦坐喫茶すれば、一味の清閑他の得て知る處にあらず、況んや翁に乞ひて掩關閑坐の四文字を獲床に懸けて靜かに浦の濤聲に耳を澄ます。今年生の竹の伸ぶるまゝに夏草の繁るまゝに任せ、荒れわたる庭に、時々梅の實の熟して墜つる音の幽けきに耳をそばだつ。されは我が目前の境界を翁に問へば梅子熟とぞ書きて與へらる。壁間の三字燦として翁が風貌をおもふものあり。我身を飯後庵に投じて一日の營み是れ我が眞生涯のみ、また何の雅俗を云はんや。筆を擱けば夕風の軒ちかく蜩のなくあり。

五十にて法衣を被たり飯後庵

梅の實の墜ちてつゞくや波の音

鈍太郎寫茶碗

陶師鈍阿余のために鈍翁秘藏銘鈍太郎茶碗を模して此一碗を造る。形貌容態略原叟が骨頭を得たり。方外に大きく案外に重し、厚くして冷めず、黑くして俗ならず、尻すぼんで小く、腹愈々膨らむ。兩掌に餘り一面を蔽ふ。圖太けれども愛撫に堪へたり。之を太郎と呼ばんに嫡庶長幼の分儼として紊り難し。今それ太郎に似たればとて二郎三郎とも呼ぶ能はず。されど鈍の一字は處世の要諦、之れを守らば中道迷ひなかるべく菩提必ず至るべし。されば捨て難きを拾ひ冠らせて命銘を鈍翁に乞ふとて

鈍太郎寫す鈍阿が樂茶わんどんな名なりとつけて給はれ

鈍太郎なりは出來ても此茶わんたましひたらぬ姿とぞ見る

姿のみ似て魂のたらはぬはあるべきやうの名にやかなはん

手造ね

去年の秋より手造ねといふことのおもしろく、殊に伊賀やきの無雜作なる仕上りの、下手を隱すによろしく、偶々何ともつかぬ茶入一つ燒きあげゝるを、鈍翁見そなはして、好き値にて買ひ請けんと强いて仰せありければ、思ひがけぬ利得してまんまと賣り渡し奉り了んぬ。翁は直に益田漢東の袋を被せ、內黑外木地の挽家を與へ、外箱の木の香新らしき蓋に、蒼龍と銘を書き給へば、裏に飯後作とわが筆のあとをとゞめぬ。

この茶入の我庵にあらましかば、春秋を問はず、夜晝を分たず、驅使せられて雪裡の芭蕉、炎天の梅ともなるべきに、翁が統帥の下に活躍せば、時によりて拔驅の功名をも立てつべく、將又雲をえて雨を降らしつべし。されど翁や器を愛して余が心頭のたのしびを解せず。

おもふまゝにならぬうき世の手造ねをくがねにかへし人もありけり
ゆびさきの業にはあれどなるまゝにまかすこゝろのうちぞたぬしき
これぞこのわが手造ねはわがこゝろうつしかねたるたのしびにして
人はいざわが手造ねはわがこゝろうつしかねつも猶ぞたぬしき

鈍翁と石垣山にのぼるの記

箱根の勝地遠からずと雖も出遊にものうく、熱海の湯ちかしといへどもいざ行かんともせず、窓に倚りて聖が岳に對し、かねて石垣山を見るあけくれのつれ〴〵に、鈍翁大人に誘はれてこの山に登ることとあり。含雪公嘗て吟ずらく

家住石垣城址東　晨昏相對感無窮
江山分占君休笑　絕勝風光在此中

實に豐公の小田原を圍むやかの山の上に一城を築きて敵營を俯瞰し遂に北條三代の覇夢を破りぬ。誰れか今昔の感深からざるべき。まして鈍翁はこの山の大半を領有して竹叢を拓き、牛耕を加へて四十餘町歩の開墾を遂げ、蜜柑を栽し、桑園を營み、蠶を飼ひ更にまた近時にせあかしあを植ゑて以て幹材は箱根細工の原材に供し、かねて枝條は自働車用木炭の資材たらしめんとす。經營着々として功を收むる處猿面公の巧智を憶はしむるものあり。鈍翁のこの行もとより絕勝風光の眺めを恣にするにありと雖も、またその經略の事績を督せんとてなるべし。われ日夕向へば見ゆる山の姿を窓のうちのみならずそとにいでゝ見ることのうれしければなり。

四月十日、快晴の朝九時といふに自働車を驅りて早川村に到り、寶蓋櫻を右に見て登る。一行は

翁の愛孫義信氏、近藤夫人、同令孃、侍女數名、五彩の裳裾をつらねたり。翁は半ば山籠の便を借り半ば徒歩せらる。急坂九折する處石を積みて段々良畑を作り、悉く蜜柑を植う。既にして松林に近づき右折すれば方三尺もあらん大石塊累々たり。癸巳の大震に搖り落されて道を沒し、枯草寂々として新樹未だ發せず。壁址規模雄大にして豐公の氣宇を憶はしむるものあり。世稱して一夜城といふ。一夜になるといふは鬱樹を一夜の中に切り倒し、白紙を張りつけて城廓と見せたればなり。小田原城中より望見すればまさに神功鬼術なり。笠掛山の名をかへて石垣山といふはこの壁址に因めばなりけり。

登りつむれば一祠あり、荒廢を極む。圍むに松林あり、風冷々又颯々として樹梢に鳴る。數樹老櫻花散りつくして春草青々たり。俯瞰すれば北條山の松亭々として今猶古への如く、早川の水涸れて石露はるゝ處昔もかくやありけんも、萬戸の甍こそは今は昔の半にも足らざるべけれ。あはれ北條の文化燦として花と咲きしも移されて江戸に結實し了んぬ。いま盛衰のあとを眼前にして感に堪へず

雲か山かゝすみまゆひくうみの上にそれと見ゆるは江のしまの山

峰のかぜふきのつよけく花はちれどいつちりたりといふ人もなし

さわがしき浮世の塵のあともなしいしがき山のみねの松風

やさけびの昔しのびてうちむかふ北條山に立つかすみかな

軍ぶね海よりよせてこの山ゆ火づゝうちけん昔しぬばゆ

かの韮山の竹もて利休が思ひつきの花筒をかけて數寄せしあともこのあたりにやとおもへば、折しも海藏寺の割れ鐘ひるを報じ來りぬ。

ものゝふのいくさしつゝも木の芽にし數寄屋のあとのしのばるゝ山

裏へ拔けて一段低き處に古井あり。この山城唯一の清水と聞けばいとなつかし

城あとの昔語りや古井戸の清水たよりてたてこもりけむ

さて椎の大木の立てる處より左へ松林をぬけ出づればふるき道ありて、これなん豐公が根府川の天正庵へ通ひしと今にいひ傳へて、昔ながらの實に風流の道なりけり、

ますらをやしげきいくさのひまとめて通ひ來にけん數寄のみちこれ

益田家石垣山農場はこの道の左側一帶なりけり。其處に松の木立の間に蜜柑庫の立派なるを見、養蠶小屋の宏大なるに驚き、牛小屋をのぞけば人待ち顏に聲立つるにぞ靑草を與へて喜ばせつ。景勝の地を相して假の席をしつらへ、箱根竹の小簾など張りて用意せられてありける程に、聞けば數日前翁親ら此處に來りて斯く命じ給ひしなりとぞ。中央に地爐を切り、赤毛氈をしき詰め、腰かけもありて、居ながらに相洋遠波の縹渺たるを望み、早川の浦波を眼下に見る。此處に紫明

刀自、多嘉子嬢、前山氏令嬢等先着せられてあれば、ともに山の蕨飯のお握りをいたゞく。芋汁に豚の肉いれて野戰の昔にかへる手鍋を繩自在に吊れば、南無三寶一陣の山風灰神樂をたつるも

一興

手鍋かけて山の芋汁にる地爐に神樂を立つる春の山風

携帶の煮物などひらきて舌鼓うつ。

食後翁は自ら仕込を開き給ふ。

壁に樂翁公筆和歌

さくら花たえてしなくばのどけさの春のこゝろをなにゝ見てまし

釜　鑵子

水指　赤桶　臺灣產

茶器　青貝　細長

茶碗　新兵衞作　銘玉柏　替　ノンコウ黑

茶杓　鈍翁作　銘武藏野

蓋置　石の輪

義信氏矢立を出してスケッチを試みらるゝに翁の賛せらるゝも卽興なりき。

誰れかあるそのいにしへのあとゝめて數寄のみやびをこゝにするひと

仇ならで相模のうみを見はらしのをすのすきやに煮る木の芽哉

吊がまに峰の松かぜかよひきて灰神樂さへ立つる御茶の湯

うみもくがもかすみながらにそれとわかつひとすじゝろしなぎさしら波

一啜腋下淸風を覺ゆ。眼前の境界天空海濶にして一帆遠く霞を破つて來る。

前田利家、伊達正宗、德川家康、某、々、々、地上の雄各々陣幕張りて屯せしは此處も彼處もなるべし。今悉くみかん畑となる。

ものゝふのまくうちはりてたむろせしこゝもかしこも今みかん畑

みかん植ゑて黃金の球をめづる世とむかしいくさの場もかはれる

尙裏山の草原にわらび狩などして歸途につきしが、紫明刀自は山籠にて、翁は徒步して些の疲勞の態も見えず、目出度歸館せられぬ。

程經て掃雲臺に上れるに、廣間の大床に老媼茶店の幅あり。讃を讀みもてゆくに田を作り、畑を耕し、蜜柑を栽し、蠶を飼ひ、鷄を養ひ、牛を繫げば朝戸出に星をいたゞきまた星をいたゞきて夕にかへる。一歲計漸く支ふるも餘す處なしと、老媼の言を藉りて何處やら翁が石垣山の閑戯を諷するに似たるものあり。落筆輕妙畫品高く、書體莊重にして最もみるべし、今の世に斯る名筆

あるべしとおもひきや、原三溪先生の餘戯なりと聞き、さもありなんと首肯して

畑つくりくらすうき世の休み茶屋きてのむ友と語るあけくれ

釣雨

昨孤雁に付して朔北の事を問ひ、今双鯉に托して聯盟の動向を傳ふるあり。聞かず問はざらんと欲するも能はず、匆忙馳驅、身を急流の鷗に比せん哉。われ夜雨莊を訪はざること月餘、而して今宵細雨到る。高風木葉を下して秋まさに老いんとす。知らず夜雨莊の面目や如何。偶々大宗禪師筆釣雨二字を獲て一壁に展す。萬頃波上孤舟浮ぶ。飄々として一沙鷗の天地を領略するに似たり。篷底秋江に睡るの客、雨聲の夢裡に入るものあるべし。草堂歸休によしなしと雖も、思ひをかの釣翁に馳せて、靜かに一盌の苦茶を喫すれば、篷雨聲あるが如し。

猿若之茶

本年申年に因みて――正月三十日夜、觀濤莊に御茶あり。正客一睡大人、令夫人、福喜多氏、拙及山澄靜齋氏御詰なり。戯れに歌よむ

土間に米俵積みあげてありければ

音にきく石垣山のたなつもの山と積みたる米俵かな

大爐の間を寄附として、鍋釜を吊りてあり、鐶附は猿にして今年のえとに因めり。

鍋釜のつるは千年老いざるのとしの初めの御茶のよりつき

壁に松花堂筆蓬萊山の詞書ある六歌仙の繪かゝれり。

めでたさをかさねていはふ春なれや鶴舞ひあそぶ蓬萊の山

本席に入れば床に砂張三象花入れに白玉椿の一輪いけてあり。

三象のはなをよせたる花入はいかなる花の鼻も折るらん

宮島釜

音にきく宮島釜は名所の三つを一つに見る心地する

茶入猿若

年へてもきみか老いざるわかやぎのます〳〵わかく見ゆるいろつや

御懸物道風繼色紙、あまつ風

みちかぜのふでのちからはあまつ風ふきもとづべし雲のかよひぢ

茶杓遠州栢樹子

庭前のかきねの竹のよこもれるむなしき節のこれや栢樹子

水指白木まげ

新らしき木の香たゞよふ水さしにきみが千と勢の影もさしけり

茶碗鈍太郎

長命は運根つよき君にして鈍をまもりて在すればこそ

灌佛會

四月八日雨、早朝鈍翁大人自ら自動車をもて迎へ給ふに吟松老人と共に打ち乘り、箱根街道を風祭迄往還して雨中の花を見る。

朝雨の松をぬらしてひとしほの色をましたる山櫻花

朝雨に傘さしながらさしもあえずぬれてぞ仰ぐ花の下道

雨の花物見車のゆきかへりこれもやあさの御茶の長露地

やがて觀濤莊に着く。大爐の間に光廣卿筆一軸かゝれり。

あるじをば花にまかする宿なればもてはやすべきよしたにそなき

照應甚だ妙なり。

水指志野

登る日の空に匂へる色見えてつゆけまさる志野の水指

青貝梅折枝茶器　遠州藏帳

青貝の匂ひ床しみ手折りけんかざしにおける梅の一枝

高麗茶碗　銘初瀨山　遠州藏帳

このながめ何にたとへんあま小舟はつ瀨の山にかゝる青雲

空中虫喰茶杓　銘遠山

空中にひいりて立てる遠山にいでいる雲の洞二つ見ゆ

袋　蜀紀

青貝の梅の匂の床しさにきほひ顏なる蜀紀の袋よ

今日は折しも灌佛會とて澤庵誕生佛自畫贊の一軸の前に百華を盛りたる砂張水盤あり。

百千々の花咲く春のよろこびもさかのひかりにあへばなりけり

不問庵御茶事

四月十八日、不問庵茶事、ネビル夫人、モンロウ嬢、ベリングトン夫人其他とゝもにまねかれて寄附に到れば、棚に古筆の伊勢物語一冊置かれてあり。折しも雨降る。

今宵しもふるあめりかのともぐ〳〵にとはずの庵をとひにけるかな

今宵しもふるあめりかの人とあひて昔男をかたるより附

席入すれば石州作一重切に白玉椿一輪生けられたり。

春雨のゝどかなる夜のうたゝねのゆめさましたる白玉椿

廣間にて會席、床に王若水筆牡丹の一軸かゝり、書院に赤繪仙盞瓶に敦盛草を生けられたり。

とつくにのいきたる花もうつしゑの草木のきみにかしらさげゝり

しづけさのまさりゆくなる春雨の宵にふさはし牡丹の唐繪

奥山の谷の底みちふみわけて見いだしけらし草のあつもり

菓子、銘、さみどり、

さす傘もそまりやすらんさみどりの葉しづくの音たかき山道

本席後坐の床に高野切の一軸、鶯、櫻の歌あり。

鳥の音も花の色香もあつめたる紀のつらゆきが水くきのあと

茶入、さつま、銘　白露

白露をたからのたまにぬきとめしすべはいかにとゝはざるぞよき

茶わん青井戸、銘　潮路

春霞八重の潮路を松浦ぶねもてきにけらしこれの茶わんは

茶杓、宗偏作、銘　卯の花

くれてゆく春のゆくへのおもほえて咲きつゞきたるうの花の垣

春さればまたもみどりの山田もる翁さびたるこれの一節

梨惠治の茶

新橋に清元をもて鳴れる老妓梨惠治の、茶に凝りてその奥を究むる程に、益々おもしろしとて當世に名ある誰れ彼れをまねきて連日茶筵を張れるが、余も亦まねかれて卯月二十三日の正午、京橋銀座西、よきことのみをきく村の隣の門をくゞりぬ。

狭き閑所にのべ段をしつらへ、先づ頼む椎の大木の蔭に叡山苔の緑さはやかに、打水したるを見て寄附へ入れば、相客は、藤原、大橋、堀越、櫻井の名流夫人の御揃ひに、われ一人まじりて割

籠持ち位の處なれども、卑下は茶の掟の禁物とて、藤原夫人を正客に次客大橋夫人、次拠、四客堀越夫人、櫻井夫人にお詰を煩して繰込む。

さて主人の向ひ附を受けて正客のゆづり合ひもさることながら、年の數を持ち出して難なく一決しければ

　　咲く花のいづれ劣らぬ色なるをわかき老いきといふさへぞうき

鴨川石の大蹲踞に筧の水のこぼるゝ景色たとしへなく、燈籠の位置形といひ小笹の下草まですがゞしし。

席にいれば床に、一文字なし、中金欄、上下萌黄紬表裝の大懐紙に澤庵和尚の筆二首の和歌

　　あひにあふ庭の花さへあるじさへ若木のさくら幾春かみむ

　　心をば花のあるじにとゞめをきてつれ〴〵そへて我やかへらむ

暮れ行く春に花をとゞめんことも難く、主人の心せかれし程推し測られて一入の興を深からしめぬ。

　　櫻花あかずながめしこの春のこゝろをさらにかへす今日かな

　　ゆく春をものいふ花に立ちまじり見るや若木のみ山櫻を

こたび家の模様など替へてこの席をぞ設けられしと覺えて、木の香まだ新らしき柱も見ゆれば

　　咲く花の匂ひみちたる新室にわれあることのうらはづかしき

釜は古あしや鷺地紋、獅子鐶附、爐ぶち眞塗、香合織部、鶴の羽根。主人の炭手前ありてやがて會席となる。料理庖丁の味のよきは今更いふに及ばず、高麗繪刷毛目の鉢、織部半開扇大皿、繪唐津酢次などいづれも氣の利きたるに、更に斑唐津や古染附の酒飲みなど珍器揃ひに、銚子の和蘭陀蓋まで味を見せて酒の利きよく滿腹し侍りぬ。季節のさ綠といふ菓子いたゞきて中立すれば、銅羅の音殷々として響き來りぬ。六點にとゞめて主人の向ひつけあり、更に一點を打たれけるが、打ち樣の巧みなるをたゝへつゝ再び席入すれば、床に遠州作銘村雲といへる一重切に木苺と白玉椿とを生けられける風情、澤庵の一軸に照應して、また一言も無く感じ入りぬ。殊に竹筒に水の浸み十分なれば、時代の色深く添ひてえも云はぬ眺めなりけり。

什器いづれも澤庵遠州に伍して堂々たる風姿品位の備はれるのみかは、取り合せの輕妙なる手際に感嘆しぬ。

花入　銘村雲、遠州公より上田宗古へ贈りしもの、文添ふ

　　大方は月のゆくへの村雲も花にやどかすけふの眺めよ

茶入　古瀬戸、橋姫手、銘追風

　　春の海に吹くや追風眞帆ひとつ霞をわけてゆく許りなり

茶杓　宗和作

たかゝらぬふしのしらべのゆかしさにそうはならぬと誰れかいふべき

茶碗　鬼熊川

みめかたちみこみすぐれてこしつきもよにゝくからぬ鬼のこもかひ

香合　織部燒

賤機の織部の色の匂ひさへ床しさ添ふるたきものゝ香よ

主人の巧者なることよ、またその心いきの床しさにたゞ感心し侍りぬ。

糸竹のしらべに通ふおたてまへさす手ひく手の程のよきかな

糸竹の世をばゝなれて宇治山の木の芽の春をしたふきみかな

一同滿喫の後水菓子引かれ薄茶たて出しにて手あつき歡待を謝しつゝ、澤庵和尙の故智ならねども、心は花のあるじをさりかぬるを辭去せしは午四時過ぎなりき。

御神水器

鈍翁大人今年正月の御茶に長治良作、住吉大明神御神水器の水指を使用せられしが、程經て陶師鈍阿をして同じ形のものを彷製せしめ、奉献松岡神社御神水器、昭和七年壬申正月吉日、相州足

柄下郡大窪村板橋住雲外、東京市外目黑陶工鈍阿造之と刻字鮮かに赤樂燒の出來榮えよろしきを松岡神社へ奉納に及び、同時にその寫し拾箇を造らしめて氏子に配與し給ふとのありて、われ其一つを拜受せしが、暫らくして翁は長井實氏を伴ひて我庵を訪はせ給ひしかば、一服進め參らせんとて、大爐の間に一軸をかけて翁が松岡神社建立の素志をしのび奉りぬ。

御社をかこふ御垣の松が岡梢にかゝる有明の月　　鈍翁

本席には大窪村風祭の長興山禪場の開祖鐵牛機禪師筆、夜半和風到窓紙半是雪半是梅花をかけ、手造ね朝鮮唐津摸方圓水指に、自作伊賀茶入、同茶碗など取り合せての俄茶をすゝめけるが、水指はいふまでもなく御神水器をぞ用ひける。さてわが手造ねの品々いづれも御賞めありて箱書し給へり。

茶入　銘　道閑　猿若に似たればとて

茶碗　銘四海　形ち大なればとて

水指　箱裏に陶器製造之大天狗と

過褒敢て當らざるはもとより、賞められての故にはあらで、聊か祈る處もあれば、われもまた御水器手造りて奉納せばやと齋戒沐浴してつくりあげ、奉献松岡神社御水器、昭和七年壬申正月吉日、相州小田原十字街住飯後庵主、陶器製造之大天狗造之と刻寫して、赤樂燒きの出來榮えは樂

屋の賞むる處手前味噌の色の如し。依つて一首の歌を添へて掃雲臺へ贈り奉りぬ。

國の爲め祈るまことをへだてずばおなじ心に神もうくらむ

掃雲臺朝茶

四月二十四日、掃雲臺に上れば春雨頻りにして新樹露重げなり。折しも熱海より森川如春、田中親美の兩氏來遊せらる。ともに廣間にて御薄いたゞく。

大床のお懸物海北友松筆面壁達磨、江月宗玩賛、小床の御懸物春屋和尚宛利休居士宮中菊見之間獻茶模様報知の文

釜　伊賀
水指　櫻肩付
茶入　紹鷗作、筒道安、梅山書付
茶杓　遠州藏帳、高麗片手
茶碗

利休文を拜して

さもこそとそのいにしへをおもふかな雲井の庭に木の芽煮し代を

爐によりて聞くや松風春雨の音も靜けき木の芽にる庵

四月二十五日朝、掃雲臺廣間の大床に原三溪老筆老媼茶店之圖と茶摘みの圖とを併べて懸けらる。出來榮え最も妙なり、蓋し題賛を讀み下すに主人を諷せしものゝ如し仍て

畑つくりくらす浮世の休み茶屋來て飲む友と語るあけくれ

木の芽つむ唄おもしろき畫さがり雲雀は空に野邊は春風

小床に蒲生氏鄕筆短冊「自參り候哉さがり藤」をかけられて

釜　九兵衞
水指　常滑燒、太郎庵傳來
茶器　片輪車模様蒔繪棗
茶杓　不味候作、筒書又徹へ遣候
茶碗　夜雨手造、銘飯後

品川の御茶事

今年壬申初夏の某日碧雲臺幽月庵に客となることありて寄附に到れば政尹筆閑の一字に

はるかなるもろこしまてもゆくものはあきのねさめのこゝろなりけり

を添へたる一軸かゝれり。清閑風雅をたのしみつゝも尙四百州の動向に關心を禁じ得ざるの寓意か、肝銘深し。

主翁の迎ひ附けを受けて一睡老を正客に次令夫人、三客田中親美氏、次拙、藤瀨夫人にお詰を煩はして席入す。

幽月庵の床には淸拙禪師筆平心二大字懸れり。之れなん嘉曆戊辰之秋の書、六百年の歲月を經て墨痕淋漓、平字の坦々として心字の團々たる、圓融無碍、一見脫落の胸襟を感ぜしむ。七凹を饒して八凸を扨れは既に蹺蹤なし、崇きもなく卑きもなく、氣魄惻々人に逼る。寬永十三年品川林中の御茶屋に將軍家光公の來臨を仰ぎ、茶を献じて賜れりといふ此墨蹟と、當時五十八歲の老遠州とを思ひ合はすれば無限の感興油然たるものあり。

天下一宗四郎土風呂に古あしやの釜かけて御炭手前あり。家康公より松平下總守忠明朝臣に賜れる唐物靑具一文字香合、二羽鶴の紋あり。會席の諸具、風味の佳なるはいふ迄もなし。中立して待つに、名銅鑼殷々として林間に響き來る。六點に留めて主翁の迎へつけあり、乃ち一同嗽洗して席入すれば、床に天下一靑海波古銅花入れに白玉椿一花數葉を活けられたる風情の氣高さ、兎や角と申すも愚かなれど、この花入こそは柳營の重寶なりしを東照公手つから賜つて會津侯の襲藏となり、轉じて柴庵氏之れを獲、再轉して鈍翁の有に歸せりとかや。その紋線の雄勁にして色澤の蒼潤なる、之れを靜かなる床に拜するとき、人をして叩頭措手を覺えざらしむ。木地曲け水指の前に唐物黑無地盆に名物靈龜茶入の飾り附けあり。茶扨、遠州侯作曲舞、茶碗黑刷毛御所丸、建水砂張棒の先。重器の數々に一度は驚嘆し、再び光榮を思ひ、三度び今日の淸福を感謝す。靈龜の嚴として威容の越格超凡なる、深居淸逸の趣ふかし。之れに配せられし曲舞は亂曲と共に遠州作の双璧たるべし。之れを手にして睹、その筒の遠州公の文字を熟視するとき、人をして轉々三百年の昔に歸らしむ。御所丸黑刷毛の茶碗に到りてはまた何をか云はんや。莊重と華麗とを兼ね備へてよく名器の體備らざるなし。之れは〳〵と嘆聲一座に滿つ。滿悅の情發してなりけり。

座を撤して更らに禪居庵にて薄茶の饗をうけて辭す。

光悅茶會之記

滿洲汗漫の遊を試み、月餘にして十月二日夜雨莊に入る。突如として掃雲臺より電話あり、來つて午餐を喫せよとやむごとなき仰越なれば直樣立つて山門を入るに、朝鮮門に近く待ち設けの人ありて主翁の手形を渡さるゝを見れば、

御歸り御目出度候、今日は西脇七海小堀竹內諸氏御紹介申上候

とあり。さては余が翁に見えざること二ケ月に及ぶを憐み給ひ、今日の茶筵に加へ給ふよと高情を感謝しつゝ居る折しも、其處へ到着の自働車より此數氏出でられたれば、挨拶をすませて後草履に換へ竹杖もちて長露地にかゝる。かの深蔭の小徑をたどりゆくに、掃き清められて落葉一つなく、秋未だ淺くして溪流水清し。

一日庵に懸け捨てたる一軸は宗旦筆夕顔畵賛なりければ、今日の趣向如何あるべきと寄附に當てられし心曠亭に入るに、御懸物は宗旦宛光悦翁の文なり。本席の様子に思ひ及べば胸躍るとぞ覺えし。秋草蒔繪小硯、墨流小色紙、唐物布袋文鎭はさらなり、唐津壺と赤繪壺の繼ぎ合せ振出、染付火馬火入の見事なる、管々しく云はずもがなを。主翁の迎ひ附を受けて西脇氏を正客に、七海氏、小堀氏、次拙、竹内氏を殿として繰込む。

萱葺門に扁して松花堂筆幽月二字圓額あり。門を入れば秋霜未だし、樹葉昨の夏をおもはしむ。筧の水音して寂々たり。一嗽して打ち仰げば、庵の褄に聾一字額かゝれり。聞かず、云はず、見て行けとの謂か。心眼を開きて見てかへらずんばと躙り口より入るに、床の御懸物は本阿彌切れにして

秋の田のほにこそ人をこひさらめなどか心にわすれしもせむ
あきのたのほの上をてらすいなづまのひかりの間にも秋やわするゝ

外貳首

餘白多し、一文字紫印金、中唐草印金、主翁の好みの表裝いと莊重なり。深きお心入れ切々身に逼るを覺ゆ。世に尊き本阿彌切れの實に翁の所藏に歸せしもの二卷あり、こたびその末端をかく好み給ひしとぞ。御挨拶ありて炭手前にかゝらる。

鐵やつれ風呂

釜　松向寺文字入、やつれ蓋
炭斗　唐物籐組、白錆
火箸　唐金七寶透、遠州所持
鐶　さゝげ、象眼
釜敷　こより編物
香合　藤原時代蒔繪

天下一品鈴虫香合は精作無比、色澤の高きこと類なく、まさに書聖道風の筆の跡に照應して一座を緊張せしむ。

光悦好み會席膳に石州好み黄漆皆具、美味佳肴はもとより、萬暦赤繪角向の結構なる、粉引德利の蒼潤なる、雲堂染付酒杯の清楚にして唐津杯の高雅なる、また乾山繪替り角皿の華麗なる、唐

津大片口、朝鮮唐津手附鉢、古雲鶴鉢など何れ劣らぬ絶品揃ひなれば、これは〳〵と深く腦底に印して忘るゝことなかるべし。御引菓子栗の金團に秋の香を賞して中立となる。

腰かけに待つ程もなく銅羅の音靜かに七點を報ずれば再び入席するに、吉野發掘の經筒に時鳥草、山芍藥の赤實と蘭科の葉と實とを生けられたる、名殘の風情十二分にして器に追福のみ志自らあらはなり。この經筒に網目の條あるが珍らしく、南朝初期の年號もありと承れば床しさ一入なり。

水指　南蠻、宗旦銘不識、千家名物

茶器　竹棗、利休手作、銘佐夜の中次

是ぞ此さよの中つきいのちとておほかたならぬ人の手すさみ　　普齋

茶碗　赤、銘障子、光悅作

茶杓　遠州作、銘柏樹子、江月和尙所銘

建水　繪高麗、遠州藏帳

蓋置　澤庵花押、無一物

此組合せの堂々として、我朝茶文化藝術の最高級の逸品なるは云ふ迄もなく、たゞ〳〵光惚として云ふ處を知らず。幾多の歷史的背景と、這般裡に圓融せる藝術至上境と、三百年を隔てゝ我と我身を斯る聯想の下に措く淸福とを思ひ浮べて轉た夢裡に彷徨するの感あり。主翁の斯る名器を

驅使して悠々江山に傲嘯し給ふ風懷の高き、この茶の主として主翁以外また求むべからず、主翁以外またこの茶を經營するものなかるべし。

更らに後山に登り、瓢池の邊りに出で、雙松庵を過ぎて觀濤莊の廣間に導かるれば、床に惺々翁筆老子騎牛の一軸かけられ、乾山畵机の上に光悅手澤謠小本二冊置かれてあり。

松花堂筆達磨繪風呂先を据ゑ、遠州好み風呂に雲龍釜をかけて

水指　紹鷗所持　斑竹桶

茶器　源十郎作耳附

茶杓　牙、利休所持

茶碗　井戸

替、瀨戸名古屋燒、遠州藏帳

花子孃の代點にて御薄いたゞきて辭去す。

歸來筆を把つて備忘せんとすれば、光悅上人彷彿として出現し給ふ。その個性の相似たる御氣に入りの旦翁其處に在りて、惺々翁恐る〳〵額の文字をものし、宗甫侯敬して茶杓を削り江月に題せしむ。嗜興高會また斯の如きやある。上人の指頭になるかの障子は其名を聞くことの久しくして見ることの始めなれば、唯だ默して首肯するのみ、また言ふことを知らず。彼の謠本の細字に

抑ふべからざる豪氣のほとばしるありて、上人が書の全部を思はしむるものあり。上人が愛藏せしといふ本阿彌切れの悠揚逼らず、老蒼簡古、適意縱横、然かも沈着重厚の趣を看取して上人の筆蹟をおもへば、似通ふ所あるはもとよりなり。而かも三蹟の第一人者をとらへてまた何をか云はんや。

嗚呼今日の一會本阿彌切れありて然して光悅上人ありや、はた上人を主として本阿彌切れを莊られたりや。過ぎし年締め切りとせられし障子を再び披かれし御志など思ひ合はすれば、上人の心友を一會の裡に集合せしめられて、末世のわれ等に餘風を敬仰せしめられし主翁の厚情謝するに辭なし。

中興名物の茶

箒庵老匠より電話にて、十月十三日の正午、板橋掃雲臺の蝸殼庵にて御茶下さるべしとなり。小田原驛にて田中親美、伊丹揚山兩氏と邂逅、ともに迎への自働車に打乘りて觀濤莊に着けば、折一柄來合せられし高橋正彦氏在り。鈍翁も紫明刀自も今日ばかりは客組の內に加りて、土間の椅子に腰かけて箒庵氏と快語中なり。

昨日の空模樣打ち案ぜられしに、今日は日本晴れにて、天愈々高く氣澄みて相模の海の見晴し譬へ方なく、伊豆の出島も聖ケ岳もいと晴れやかに見ゆ。かの小田原城址の二本の巨松近く老龍の蟠居するさま、實に浮世に遠き下庵よとおもはしむ。

既にして箒庵主の御迎附あり、一同鈍翁を先たてゝ繰込む。松花堂筆閑雲亭の額ある門を潜り、蜜柑の植ゑ込みの間を飛石傳ひに、躊躇に一嗽して席入するに、醒々翁の自ら經營せし此庵は開扉せられて土間より障子を披きて上る。板壁床の御懸物、蘆葉達磨の圖、門無關筆にして淡墨の省筆、眼光烱々として濃墨の活潑見るからに宋畫の眞髓に觸るゝを首肯せしむ。

觸三竹梁王一快一々渡レ江　九年冷一坐重々話一墮
一花五一葉自分披　不レ在三春風着衣吹一
圓照　師範　贊

筆體勁枯、直ちに其人を見るが如し。東山珍寶、道友印鮮かにして、一文字紫地印金、中上代金紗、上下紀、牙軸、表裝の結構印面を掩ふとも一目それと知られたり。棚に珠光坐像あり。對配亦相稱ふ。

鐵やつれの角風呂に松向寺文字入釜をかけらる。炭手前を省きて直ちに會席に移り、主人も御持出ありて相伴せらる。遠州好膳部皆具、織部向附、尹部德利、黃瀨戶酒飲などいづれか寂の骨頂ならざるはなし。御菓子はちもとの栗羊羹、兎やの團子など後の月見に因まれたるも風情多し。

正客は山の上に無き御菓子なりとて心入れを謝し給ふ。

中立して待つに等庵主竹杖つきて迎へ給へば再び席入す。後坐の床には古銅下蕪象耳御花器に毬栗一枝をさし、時鳥草一莖を添へらる。寂々として深山空谷に在るおもひあり。御花入は三冊所載、遠州不昧侯等の襲藏、眞に中興名物中の尤なり、形容溫雅、色澤和潤、堂々たれども亦よく小間にかなふ。

水指　瓢、南蠻締切

茶入　玉拍子、銘增鏡、中興名物

ますかゞみ手にとりもちて朝な〳〵見れどもきみにあくときぞなき

茶碗　赤、長二郎作、仙叟銘、無一物、中興名物

茶杓　遠州作共筒　銘木の葉

同枝をわきて木の葉の色づけばにしこそ秋のはじめなりけれ

御茶銘主人の好み給へる鶴の白、芳味殊に勝れたり。

親しく重器を拜見するに增鏡茶入は本歌玉柏にせまるものあり、石はぜの一ところ黑くして、全體の釉色高く、金氣の湧き立てる樣、手にとりもちて飽くことのなく愛惜ますばかりとよくも銘せられしもの哉。遠州作茶杓木の葉、節裏の削り込深くして常の如くならず、かい先のいと寂びたる、此銘ある所以なるべし。茶碗長二良作赤、稍小型にしまりて、手取り重く、釉かせたる方の寂加減、まことに禪寂の趣ふかし。見込しぼみて深く、高臺の無雜作にして、そのあたりに思ふ許りの凸凹あり、兩掌にとりて底あたりよく、眞に愛撫に堪へたる名碗なり。

等庵老匠の天下に盛名を博せられて既に年久しと雖も、後輩余の如き未だ親しく淨室裡に喫茶三昧の風姿に接せず。偶々斯る高會に列るを得て、天下の名器名幅を觀る、眞に人間の清福とやいはまし、深く謝せずんばあらざるなり。炭手前を略したればとて、遠州藏帳、堆朱寒拾香合のみ持出で示さる。立ちて筆を弄するは山、墨を磨するは得、刻深く圖鮮やかにして氣品高し。

それより觀濤莊の廣間に動座すれば、主翁御心入れの飾りつけにて、床に松花堂竹筆詩對幅をかけられ、淀君所持高臺寺蒔繪机上に足利時代繪卷物二卷を置かれ、鐵やつれ大風呂に古鏡蓋大やつれ釜を懸けらる。

水指　毛織

茶器　宗旦手作棗

茶碗　鹽筒、三島呼つぎ

茶杓　牙

御薄いたゞきて辭す。

二子嶺のあたり夕べの雲見えて晩鴉の急ぐあり、金風蕭條さすがに秋色ふかし。

唐櫃山莊

秋雨にぬれて十月十六日名古屋市外八事山の唐櫃庵を訪ふ。一行藤原一睡老、令夫人、如春氏と余と。自然のまゝなる山地を拓きて移されたる田舍家のいと古びて、四つの百とせは經つらむ煤の古色うれしく、萱屋の厚く軒深く差出でゝ裏の見ゆるあたり枯寂の感尊とし。軒端をめぐる庭は青芝の滿ちて秋草の花のかつ〳〵咲けるもあはれ深く、刈込みの生垣をへだてゝ遠景の野山見はるかす許りなり。この庵はもと攝の有馬の奥なる唐櫃に在りしに因みて唐櫃庵と呼び、鈍翁大人の筆になれる木額かゝれり。壁に鳥羽僧正筆鹿猿の戲畫、一文字紫地印金、中シケ、上下紀の一軸、處柄また季節に稱ふのみならず、あたりの物さびたるにふさはし。大爐を切りて時代羽釜を吊りたる繩自在の鯉の木彫の煤に光りて昔を語るのみかは、繩の海老を喰ひ込めること寸餘にも及びて愈々古調を讃ふなりけり。時代瓢の花入れに秋草さして懸けられたる柱の底光りて床しきに、板戸の面に手斧削りのあとのしるく、拭き込みの艶々しさも女の背丈にとゞまれるなど田舍びてよし。

水指　ヒシキ藥罐

茶器　一閑棗、初代岸
茶碗　柿の蒂、銘京極
茶杓　僖首座、銘閲遠
菓子鉢　黄瀬戸

柿の蒂茶碗は此手の尤物と豫て聞きしが、伊羅保、とゝや、井戸など大寂びの特色を兼備して重器の姿申分なく、口作りに力あり、見込みに景色あり、また内に微かなる一筋の箆目ありて、その形の柿の葉なりなるもよきに、外側に火間あり、高臺の寂び一入にしてまさにこの季節の天地を表象するに似たり。

主人高松氏を初對面に見れば、蓬霜にしてよく此庵の主たるに適し、座作如何樣禪寂の氣品あり。一碗の苦茶此の境地に應じてまた忘じ難きを覺ゆ。更らに後庭に築土園ひの一處ありて隅に一屋あり、時として寄附にまた中立にあてらるべく、傍らに窯の設けられありて樂陶に耽けらるゝことも氏が餘戲の一なりと聞くだに餘情多し。

秋雨にぬれたる露地の樫の葉の露もうれしき山の庵かな
山の庵まろらなる屋のかやぶきのあつきはきみが心なるらむ
奈良めきしふるきむかしをさながらにこの家にしめてすむあろじかな

朝の雨やがて日照雨と晴れゆけば山の端しろく霧立ちまよふ
けふよりや色づきそめん山の庵の庭の眞芝に秋雨のふる
初雁の聲さびしらに聞く夜半のねざめやいかに山の上の庵

一同打つれて岡谷家を訪ふ。

一笑庵の茶事

名古屋城構築に當り、古田織部正重能また命をうけて一部工事を督して此地に在りける間、自ら好みて營みし席の後世に遺れるもの實に岡谷家の一笑庵なりとす。嘗て高田高陽之れを修して守りしが、後當家に移されて現存するなりけり。此由緒ある古席に於て御茶の相伴いとうれしくて

世事は皆これの庵の一笑ひたゞにむかしのなつかしきかな

岡谷家の玄關を上りて先づ也有筆招鶯館の小額を見る。也有以前に也有なく、也有以後また也有なし。この地が生みし俳文の耆宿と當家との交渉に想到して轉た幽情を禁ぜず。

寄附の床に仁清筆蒲に翡翠の一軸かけられたり。根來汲出盆に應永年號あり。古色掬すべし。本席には宗旦筆一笑の額かゝり、床、寸松庵色紙、花見んと人まつ軒の、古伊賀置花入に珠數茶、野菊、三山拂子を生けらる。鹿苑二字入大やつれ風爐に嘉隱軒文字入淨味釜をかけられて炭手前

あり。唐物青貝布袋香合の見事さ目を驚かす。

水指　木地曲
茶入　織部丸壺
茶碗　粉引酢次、銘翠浪
茶　道庵共筒

此席に座して靜かに三百年を回顧するとき世上の榮枯悉く霧消し去りて、目前その柱、その天井の煤の色のみ、尊き古香の漂ふなかにまさに織部和尚に相見するのおもひあり。この組合せの一に懷古の情をそゝるに在りて、斯くてまた此席に一會の客となるの因緣忘じ難きものあるなり。寸松庵色紙につきてはまた何をかいはん。釉藥を見ぬ、こげ一面の古伊賀花入の佗びて、實にいひ難き枯寂を湛へたるに、珠數茶の廣葉三つ四つよくかなへり。一見唐物ともおもはるゝ織部丸壺の溫雅にして色澤高く、漆黑のうちに土色を見せたる味の深き、はたまた酢次茶碗の堂々として而かも補輯以て幽趣に託する處横溢するものは古人の心なり。道庵の茶抄時代の風情を添へて更らに古織其人を出現せしめずんばやまざるを覺ゆ。

更らに廣間に動座すれば、床に齋昭公筆紅葉畵賛の一軸、古銅獅子耳花入に秋草を生けらる。此處にて有名なる古筆手鑑、鳳凰臺を展觀して辭す。

光悦の茶

我が聞き知れる程は如春森川氏こそ今の世のまことの大茶人にて在すなれ。年頃氏の庵居を訪ひまをさまく願ひけるに、今度霜月の十七日朝、一睡大人に隨伴する機會を得、彌釜敷庵の寄附に到着すれば高松氏先着して在り。壁の懸物光悦文「頓而上洛可達鬱積候」の文字あり。其意蓋し氣晴らしの風流事を盡すといふにあれど主人の寓意やいかに、一同相見て苦笑するのみ。長爐に竹自在に時代鐵瓶を吊りたる竹は鈍翁の贈らるゝ所なり。古丹波瓢形振り出しに衆目を注く。既にして主人の迎付あり。緣側に出づれば其處に展開せし眺望の佳絶なることよ。野山の秋景稍々に色づき、山下の稲田遠く連りて、尺馬寸人指呼の間に在り。朝霧の絶間に見やらましかば如何に、水鶏の來鳴く夜半は如何に。

水桶石に落つる筧の水音幽けく、古き時代を語る石燈籠の姿のよき、木蔭に置かれし大伽藍石の水を含める色など心ゆく許りなるに、木の間を透きて遙に遠景の見ゆるも床かし。

彌釜敷庵は德川初期の建物にして、もと木曾川邊りに在りし大庄屋の母屋なれば、總檜の木造りに時代の煤色深く漆黑を呈し、結構の宏壯と相まちて田舍家中の田舍家といふを妨げず。席といふは十疊の間にして、外鴨居に「隱市」木額かゝれり。筆者萩坊乘圓、實に大隱の面影は此庵の主

人に見るを得可しとなるべし。

床の御懸物三十六人集歌切、鹽の山さし出の磯にすむ千鳥きみが御代をば八千代とぞなく、前に餘白多く、終りに色替りの留めありて前後相かなへり。その糟色紙の美にして寂び、筆蹟の雄勁にして雅なる。また贅言を要せず。一文字紫地印金、中風通角紋織、上下唐子緞子の落つきて、まことに主人の好み給へる風懐をおもふべきものあり。朱塗盆に古銅桃底を飾られて、初霜椿一花を生けられたる風情いと高し。風呂先聚落第欄間透し彫を疊附きとしたる銀臺紙張り二つ折りに光悦書色紙

大原やをしほの山にけふこそは神代のこともおもひいづらめ
いたづらにすぐる月日は多けれど花見てくらす春ぞすくなき

外一首

を張り付けたる、凡て光悦翁に面接するが如し。

炭手前あり、器物左の如し。

釜　光悦好四方、鷹ケ峰太虚庵の文字あり
炭斗　黑塗、わげ物
釜敷　唐物臼合

火箸　時代
鐶　時代
香合　志野、菊紋
灰器　主人手作
灰匙　唐物獅子頭

志野香合を拜見するに乳色にやゝ黄色を加へてほんのりと赤味あり、菊花の鐵釉の發色美事にして高臺のあたり作ゆきのしまれる、いづれは志野中の志野なるべし。

水指　南蠻芋頭、はんねら蓋、萬曆三年源泉寶罐の刻字あり
茶器　五郎棗、小形
茶碗　赤、乙御前、光悦作
茶杓　宗旦共筒銘黑

此御道具組を見て直ちに板橋の鈍翁大人の先つ頃營まれし光悦茶會を想起し東西呼應の盛筵に二つながら陪するの好運を感ずること深かし。此に佳話あり主人嘗て秘藏の三十六人集歌切れの新裝成れるを名寶展に出陳せられしに、人あり曰く、如春君の惡口に似ず、此表裝は如何にと、酷評の主は外ならぬ今日の正客一睡老なり。此の事駟馬よりも早く當地に傳りて、もとより主人の

早耳に入りしは三年前なりき。鈍翁また第三者として手を打つて此いがみ合ひを傍觀し、更らに他の歌切れの新裝の出來榮えを督せられしが、是を一睡老の觀賞に入るべしとの嚴命默し難く今日の床に莊られしとなん。されば同席の岡谷、高松氏等は、鈍翁に代りて正客の批評如何と詰め寄りたるが、正客もさる者とて巧みに切り拔けられて、寄附の光悦文をして語らしめたる鬱積を主客一座哄笑裡に發散せしめたるが三斗の溜飲を下げたるはわけて主人なるべし。知らず鈍翁が苦笑せらるゝや否やを。更らに怪我の功名ありけり。正客何氣なく天井板に目をつけて、板は別物なりやと奇問を發せらるゝに、目を白黑して打ち驚きたるは一同の相伴なりき。天下一の田舍家に批點を打ちて御叱り如何と案じたるに、正客の一言圖星に當りたりとて、主人早速に兜を脫ぎ、よくも見られたる哉、實はその通りなるが、横濱の三溪老も板橋の御本山も、未だ此れを看破するに及ばずとの挨拶に、一同胸なでさすりたりけり。乙御前は定評ある名器、兎や角いふも愚かなり。之れに配せられし五郎棗亦結構いふ許りなく氣品高くして、替袋の數拾に及べるも皆主人の丹精なりと承るにつれ以て其器に執着の程を察すべく、且翁の茶杓此一會に缺くべからざる一役とこそ申すべけれ。

次ぎの間に動座すれば、壁に光琳筆布袋圖を懸けられ、大爐の湯釜たぎりつゝあり。此處にて前栽の葡萄の實をいたゞき番茶をすゝりつゝ暫時快談に耽りぬ。

秋晴るゝ今朝とひくれば見晴しの彼方に遠くゆくこゝろかな
朝霧の絶え〳〵にしも山下の稲田飛び立つ鳥の見ゆらむ
月讀のしろ〴〵更くる秋の夜は水鶏の聲もさびしかるらむ

伊藤氏の御茶

名古屋は城でもつといふ、その名古屋城よりもふるき伊藤家の暖簾を潜りて、さすがに御大家なりと目をひきしは煤けたる柱、鴨居の永の年月、幾百千の人の手に拭かれて、自ら發せし艶の底光れることなりき。まづ此時代の家に昔ながらに應接せらるゝとの床しさを感じつゝ席入するに、いにしへの油ともし火に煤けたるを拭き込み〳〵て漆の如く光れるは臺目柱といはず、床框といはず、天井の板といはず今の世の電燈の光りを反映して、まことに夢の國に入りつる心地ぞしける。

床に一休和尚圓窓の御懸物をかけて、宗旦尺八竹花入れに芒、野菊など生けられたり。主人出てゝ炭手前あり、香合を拜見するに錫緣蒔繪橘紋樣の結構にして、時代を鎌倉といふべくや、南北朝を下るまじと一同評定したりけり。鐵風呂に獅子鐶付古天明鶴首釜をかけて

水指　安南
茶器　金輪寺、藤重
茶盌　古伊賀
替、赤樂ノンコウ、銘虹
茶抄　利休作

このあとに倶樂部の宴會もあれば、一同急ぎ立つるにぞ、それと察せられて、未だ湯沸かねば茶を煮るにわかしとて小湯下さる。既に朝來二會を重ねしと故客一同この臨機應變の處置に感じあひて、箱書附を拜見して辭しぬ。

ふるき香のたゞよふうれし煤の色の光りのなかに坐りてあれば
古への油ともし火よゝに照りて常光る屋となりにけらしも

翌日再び伊藤家を訪ふとありしに、今度設らへられし新席に請せられぬ。一睡大人、令夫人、岡谷、森川、高松諸氏及拙繰込むに、床の御懸物大燈墨蹟、大日偏照而破昏云々、一文字印金、中安樂菴の表裝目覺むる許りなるに、砂張松本船花入を吊りて秋草を巧みに挿されたる風情えもいはず、唐物螺細卓に古染附香爐を莊られたり。

臺子飾りは朝鮮風呂に寒雉作霰釜を懸けられ、水指和蘭、抄立青磁の御取合にて

茶入　正意作、挽家書附遠州筆脇田

茶盌　堅手、有樂齋書附、銘若栄
　　替、仁清
茶扨　遠州共筒、奈良孫七様へ送るとあり
菓子器　存星

御道具拜見中に御薄いたゞく

茶器　不昧好、菊紋蒔繪、在判
茶扨　牙、紹鷗所持

御茶入の名品なるは勿論、茶扨の作ゆきの見事なる、また堅手茶盌の堂々として深く、高臺の高き、形ちに變化あり、浸みあり、割高臺を想起せしむるものあり。

次ぎの間にて當家秘藏の末の松山釜を拜見するに、古あしやと覺しく、金味見事にして、並松の地紋いと鮮やかなり、鐶附獅子、古銅の寂蓋よく取り合へり。當家祖先の箱書付には子孫をして永く此釜を用ひざらしめんとあり。又近頃當家主人が清州の氏神の社より下げ戻されたる二尺に三尺位の繪馬額を見るに、圖は御幣を擔げる猿にして、當家の祖伊藤蘭丸が同じく申年の織田信長と連名にて奉納せるものなりとぞ。歴々として其文字を讀み得るなり。末の松山釜といひ、これの繪馬額といひ、斯る尊とき祖先の由緒を語るものは實に當家の至寶にして、子孫繁昌、御家萬歳、豈啻に當家のみの慶事たるに止まらんや、又以て金鯱と光輝を競ふものと謂ひつべきなり。

更らに唐四郎作古瀬戸水指を拜見して辭去、一同關戸家に赴く。

關戸家を訪ひて

雙ケ岡の法師は、今めかしくきらゝかならぬをうれしみて、大かたは家居にこそとざまは推しはからるれとは書きのこせり。實にのどやかに住みなしたる舊家をおとなふ程心ゆくものはあらじかし。關戸家は、伊藤岡谷諸家とならびて、德川家の招請によりて清州より名古屋に移り住みて以來、三百年の星霜を經て今日に及び、金城の門閥家として東西に聞こえける大福長者なりけり。その收藏の古筆切れは天下の殊寶と稱せられ、その藏器また稀世の珍たるもの多しと評せらる。今しも此家の暖簾をくゞりて二百四十餘年前の建築にかゝる廣間に請せられ、爾來一木一石と雖も動かすことなかりし庭に面して、至寶稀珍に接することの幸福この上やあるべき。切にかの法師の言の葉の色もしみ〴〵と見ゆるぞかし。

御床のおかけもの藤原伊經朝臣大色紙

あきはなを本たゞ那ら春こそ於毛ほゆれを支のうは可せは支のしたつゆ
をくらや万ふ毛とのゝへの者那春ゝ支本の可に美ゆるあきのゆふくれ

鎌倉彫銘賴朝香合
青磁桃香合
染付辻堂香合
伯庵茶盌
粉引酒次銘七賢人
祥瑞在銘酒飲
青磁シノギ酒飲
古筆帖

を拜見して辭しぬ。

白雲の奥ふかけれどふみわけてこしかひあれやひらく關の戸
關の戸はひらきながらもみ寶にとまるこゝろはゆきあへぬかも
目にとめし數のみ寶板橋の翁とゝもに語りあはゞや

釣雨と地獄

秋雨しきりなる午後飯後庵に鈍翁大人をむかふ。寄附のかけもの鈍翁大人棲歌懐紙、大風のあとゝも見ゆる田の面は實のりになやむ稻にぞありける。本席床、春浦筆釣雨二大字。花器、自作伊賀うづくまる。花、野草。旅次名古屋驛頭に求めし金鯱城型、蓋物を香合に使用せしに殊の外御感賞あり。

釜　寒雉　蒲團釜
水指　南蠻　朝鮮水運び
茶入　芋の子　銘野寺
茶碗　井戸
茶杓　桐園共筒

粗茶參らせしに、今宵は掃雲臺にて晩餐を共にし、後喫茶夜話すべければとの仰せに從ひ、迎への車にうち乘りて山を登る。相客は近藤國手夫妻及令孃。
廣間の大床には守景筆田舍秋穫圖對幅、小間の壁に清巖筆地獄二大字をかけ、寸松庵傳來砂張舟を釣りて紅葉と滿珊とを生けらる。炭手前あり、朝鮮唐津四方香合の美事なる譬へ方なし。

釜　宮嶋釜摸
水指　新南蠻　上海戸來
茶入　膳所挽溜、遠洲藏帳二ケの内

茶碗　玄悅
茶杓　普齋共筒　銘一時雨

雨やまず、槻の大木の落葉の明日の朝たやいかならんなど思ひうかべつゝ辭して歸りぬ。

ひとしぐれふりにし庭のあしたには落葉の上の落葉なるらん

三溪先生の詩書

原三溪先生の書に接する毎に恰も古人に面するのおもひあり。慕うて之を求めんとするも術なし。偶々中村子に諮る。子の曰く或は余が爲めに獲ることあらんと。後月餘にして中村子早朝余が門を叩く。迎ふれば則ち先生の書幅を携ふ。喜びて一壁に展す。

故人凋落如秋柳疎葉逐風日夜飛獨有青山遙待我白雲堪臥早須歸

古城秋草色一笛夕陽殘蕭條英雄業不如牛背安

先生は高踏深晦の人、青雲を白眼視して晏安たれども、故人の慘事相次ぐに及びて、感懷轉た蕭條たるものあるべし。我庵は石垣城趾の東に在りて常に英雄の業を憶ひ、また歸牛背上吹笛の童子を視る。夕陽函嶺の西に隱れて、黃昏無限に好し、まさにわが所懷をのぶるに似たり。此二幅夜雨莊の佳什なり。以て隣居鈍翁大人に諗示するに足るべく、以て獨居喫茶の友たるに餘りぬ。記して先生の高風を欽仰し、また中村子の友情を謝す。

昭和七年十一月二十日印刷
昭和七年十一月廿五日發行

著者兼發行者　東京市芝區琴平町二十七番地　横井半三郎

印刷者　東京市芝區田村町五十一番地　福井安久太

終